
アマキス・プラス +

FafunarV

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アマキス・プラス+

【Zコード】

N6360V

【作者名】

Fafunarr

【あらすじ】

ラブプラス、アマガミ、キミキス、三つのギャルゲーを一つにしました？

誰得？

いや俺得？

キャラゲーとストーリーを作るので

そこまで他作品の意識は薄いかもしれません。

登場キャラ

高嶺愛花 小早川凜子 姉ヶ崎寧々 紗辻詞 桜井梨穂子 棚町薰

上崎理沙 七咲逢 中多紗江 森島はるか 星乃結美 祇条深月

一見瑛理子 咲野明日夏 栗生恵 里仲なるみ 水澤摩央

次回ヒロインリクエスト募集中！！

募集要項は活動報告からお願いします！！

Twitterでアマキス・プラス+の更新情報をGET！！
fanfunarvで検索！！

フォローしちゃおう！！

はじめに

アマキス・プラス + は
大人気恋愛ゲーム

アマガミ
キミキス
ラブプラス

のキャラクター達で
勝手にワイワイガヤガヤキャッキャウフフさせようつてな魂胆の
俺得小説です！！

アマガミ、キミキス、ラブプラスらからの
賞利を目的とした制作の為に作った小説ではあります。

また
現存します人物、市町村、キャラクター、建築物、公共物等は
ちょっと関係あつたりなかつたりします。

という訳で

アマキス・プラス +

お楽しみくださいませ！！

作者でした
グッバイ！！

次回ヒロイン募集のお知らせ

ただいまアマキス・プラス+では
次回作のヒロインのリクエストを募集しております。

以下の説明に従つて御投票お願いします！！

一人持ち票を三つまでとして

感想欄か活動報告コメント欄に好きなキャラの名前と
そのキャラに何票入れるか名前の横に書いてください。

例1)

中多紗江 3票

のように一人に3票入れてもいいですし、

例2)

祇条深月 2票

咲野明日夏 1票

例3)

水澤摩央 1票

里仲なるみ 1票

上崎理沙 1票

と分割で入れても構いません。

なお、投票可能キャラクターは高嶺愛花 小早川凜子 姉ヶ崎寧々

絢辻詞 桜井梨穂子 棚町薰 上崎理沙 七咲逢 中多紗江 森
島はるか 星乃結美 祇条深月 二見瑛理子 咲野明日夏 栗生恵
里仲なるみ 水澤摩央 塚原響 田中恵子 小早川美千 川田先
生 高橋先生 夕月薰子 夕月瑠璃子 飛羽愛美 飛羽愛歌 梅原
正吉 栄明良

妹二人はちょっと受け付けていません。

時期が来次第、妹二人の登場を予定しています。

ではよろしくお願ひします！！

高嶺に咲く愛の花1（前書き）

メインヒロインプロフィール

高嶺愛花 《たかね まなか》

出典作品・ラブプラス

血液型：A型

誕生日：10月5日

星座：天秤座

趣味：お菓子作りとピアノ

好物：焼き芋

テニス部に所属する。2年C組

一人称は「私」。

実家は開業医で成績は常にトップクラス（絢辻詞、星乃結美と良い勝負）でテニス部女子のエースというまさに才色兼備を絵に描いたようなお嬢様だが、育ちの良さゆえ真面目すぎて近寄りがたい雰囲気を醸し出しており男子にとつてはまさに「高嶺の花」である。

しかし、その硬い雰囲気の裏には辛い過去があった。

ボーネールと太い眉毛が特徴。「なんて」が口癖である。

高嶺に咲く愛の花1

僕は「一年の城谷信一、
でどうして今、走っているかと言つと…」

「テニス部の入部届け出すの今日までなのにいい?」

「一年の勧誘にひつかかって、渋々入部することになったテニス部の
入部届けを出し忘れていたのだ。

「どうしよう…鈴木先生いるかな?」

職員室のドアを開けると、ちょうど高橋先生と鉢合わせてしまった。

「うわっ?た…高橋先生ごめんなさい?」

「あ、び…びっくりした、城谷君ね?」

「はい、鈴木先生を探していて…。」

高橋先生は職員室を見渡す。

「うーん居ないわね、じゃあ部活のところにいつたらどう?」

「そ? そうですか、ありがとうございました?」

規定の4時まであと二十分だ。

あの角を曲がれば…と

いきおい良くカーブした瞬間だった。

「キャア?」

「やべえ?」

角を曲がってきた女の子とぶつかってしまった。

「いつててえ…君、大丈夫?」

「あ、はい? あなたこそ大丈夫ですか?」

女の子は白いリボンで縛った黒い髪を揺らしながら、
スカートについた砂を払つた。

「あ…うん大丈夫、ごめんね急いで…」

「どうして急いでたの？」

「あ、それがさ、テニス部の入部届けを出しここに来ていたと思つて……」「鈴木先生を探していたんですか？」

「うん？」

女の子は少し笑った。

「テニス部の部室、反対側ですよ？」

「へ？」

確かに、いつもから先は掃除用具室だ。

「今から部室に行くので、私が持つて行きますよ？」

「ほ…本当?、って君、マネージャー?」

「違うわ、私は一年の高嶺愛花、一応選手です。」

「あ…ごめんごめん、俺は城谷、城谷信一。よろしく、高嶺さん」

「あ、はい?それじゃあ私は部室に行くから。あと、呼び捨てで大

丈夫ですか?」

「ん?じゃあよろしくな高嶺……」

「はい!……」

そう言つと高嶺は部室に向かつて歩いて行つた。

俺と彼女の出会いは

こんな些細なことだった。

「ねえ城谷君、大丈夫?」

「あ…桜井、うん…まあ問題ないぞ。」

桜井にそう言いつと、

後ろから肩に手を載せられた。

「桜井さんの言いつともわかるぞ?」

「柊…しようがないだろ?、昨日結局、鈴木先生が休みでさ。担任から怒られて…」

「城谷君はしょっちゅう遅刻とかするもんね~?」

桜井はまるでお姉さんぶつっていた。

「とゆうより、桜井さんもおっちょこちよいだけね。柊に釘を刺されると、桜井の顔は一気に強張った。

「ショッちゅう口けたりするからね。」

俺も負けじとちよつかいをだす。

すると、さらに桜井の顔は強張つてしまつた。

「うう…一人してヒドイよお?」

「お?また桜井弄りか?」

職員室から帰つて来た香苗さんも

桜井を見てニヤニヤしあじめた。

「もお?香苗ちゃんまで?」

「あはは、まあ桜井の魅力つてそんなとこじゃないのか?」

「え? そうかなあ?…。」

「そうだね、魅力とも解釈出来る…あと相原に呼ばれてたんだ、じゃあ俺は隣のクラスに行つてるよ?」

「ああ、」

柊はいそいそと席から立つて廊下の方に走つて行つた。

「あ…城谷？君にお密さんだよ？」

「俺にか？」

「ああ、入つていいよ。」

「はい、失礼します。」

ドアから入つて来たのは、高嶺だった。
ポニーテールを揺らしながら、
小走りで俺の方に向かつってきた。

「昨日の事なんだけど、」

「ああ…。」

「鈴木先生、まだ提出期間中に直帰しちゃつた「ツチも悪かったよ
つておつしゃつて。」

「あ、出張だつたんだね。」

「はい、今日ちやんと受理しましたから、安心してくださいね？」

「ありがとう、高嶺？」

そう言つとペコリと頭を下げて、
また小走りで教室から去つていった。

「へえ、城谷君、高嶺さんと仲がいいんだ？」

香苗さんが俺の顔を覗き込んだ。

「え…うん、まあね」

生返事を返すと、桜井がうんちくの如く語り出した。

「高嶺さんつて、この学校で一番田にお金持ちなんだつて？」

「え！？そんな人なの？」

「うん？一番はほら、音楽でいつもピアノを弾いてる…」

「祇条さんよね？」

香苗さんが答えを言つと

また桜井が拗ね出した。

「あはは、桜井つてば可愛い？」

「 ハヤシよお？ 香苗ひやん……。」

俺は次の授業が全く頭に入らないくらい
そのお金持ちといつ言葉が
頭に蔓延っていた。

高嶺に咲く愛の花③

「確かに、高嶺さんって近寄り難いよね。」「異様なオーラ…」

「愛歌先輩、そんな」と言ひちやダメですよ
今日ものんびり茶道部にはもう一人の部員
祇条さんが顔を出していた。

「よう深月ちゃん、あんたがいると場が引き締まるよ?」「いえ、そんな事ありません夕月先輩。」

「りほっちとは相反…。」

「もう? むつこ先輩も愛歌先輩もヒドイですよ?」

まだ寒さの抜けきらない四月の放課後

部室はその空氣さえ吹き飛ばす様に暖かい笑いが溢れていた。

「それにしても城谷さん、JJJ一週間、とってもお疲れの様子でしたよ。」

「テニス部つてキツいのかな? その、ランニングとかって?」

「愚問だな、りほっち…。」

「そうだと思いますよ、私もお父様の影響でテニスをしていた時期がありましたから。」

祇条さんは「ソゴソと筆箱を取り出すと、
写真を一枚、取り出した。

「おー! レは凄いじゃないか?」

「はい、十羽野市民テニス大会でジュニアの部の優勝をした時の写真です。」

「へえ、深月ちゃん、凄いねえ、いつまで続けてたの?」

祇条さんはまた筆箱から写真を取り出すと

「中学校までもなんです。せう、この時も優勝したんですけど…。」

「あれ？…」この一位の子って…。」

「高嶺さんだよお？」

[写真の中で一位のカップを手にしながら泣いて子が見えた。
顔は見えない様にカップに隠れているが、そのポニー・テールが
彼女を高嶺さんだと教えてくれている。

「へえ、こんな過去があつたんだねー。」

それからじばらぐ、茶道部の話題はこれで持ちきりだった。

高嶺に咲く愛の花4

今日はホームルームが遅くなつて、
結局、部活にもそれが響いてしまつた。
俺はラケットの入るデカイバッグを背負い、
いきおいよく階段を駆け下りて、部室へと向かつていつた。

心地よい風と共に、

テニスコートからホイッスルの音と審判の声が聞こえた。
「カウント3・0? マッチウォンバイ? 高嶺?」
その後疎らな拍手と
ざわめきが聞こえて、

高嶺が部室に戻つて来るのが見えた。

「あ…城谷君、今日は部内の練習試合だから貴方はまだゆっくりしててもよかつたのに…。」

「嫌、そういう訳にもいかないだろ?人の試合を良くみて学ばなくちゃ」

「そり…よね、『めんなさい。』

高嶺はいつに無く暗い顔だつた。

「いやでも…そ、それにしてもさつきの試合、圧勝だつたじゃないか?凄いよ高嶺?」

「あ…うん、でも偶然だから。」

「そり、なの?」

「う…うん、そり…じゃあ私は先に帰るから。」
すると高嶺は早足で部室に駆け込んでしまつた。

「どうしたんだね?」

俺も一応部活を始めていると、手塚部長から呼び出された。

「城谷君、ちょっとといいかな?」

「はい?」

「コートの隅に移動すると

手塚部長がこう話した。

「再来週に新入部員を含めたダブルス大会をするのがこのテニース部の恒例行事なんだよ。」

「へえ、親睦会ってことですか?」

「まあそうだね、で君も来週の木曜日までに相手を見つけておいて欲しいんだ。」

「え…あ、そうですよね。はい?」

「君は同じクラスの人もいる事だし、大丈夫だよね?」

「はい、じゃあ俺は練習に…」

と練習に戻ろうとした時だった。

「コレは男女混合ダブルスだからね?」

「へ?」

思つても見ない言葉だった。

確かに同じクラスの女子はいるけど

俺はまだその人達とは一言も喋っていない。

目の前が真っ暗になるとはこの事かと思った。

高嶺に咲く愛の花 5

「はあ……どうじよつかな……。」
学食のトレイを持つてボーッと突っ立つていると後ろから声をかけられた。

「ほら、君の番だよ？」

「へ？ あ……あえっとそのあれぐだきこい？ あーっとA定食？

「はいA定食ね、」

俺はA定食をトレイに乗せて運んでいると、

もう相席しか空いていなかつた。

「どうしたもんかな……。」

ぐるりと一周した時だ。

「城谷君？」

「え？」

相席に座っている高嶺が声をかけて來た。

「その、昨日はごめんなさい。私、嫌ない」と油に出しあひやつて……

「ああ、全然気にしてないよ。」

実際、混合ダブルスの方が気になつて仕方ないくらいだ。

「よかつたら、その……私、席空くから、座つて？」

「そんな、悪いよ……まだサンドイッチ一つ残つてるじゃないか。」

「あ……うん、じゃあ一緒に……どういだ？」

高嶺がサンドイッチを手前に退けると

俺はそこにトレイを置いた。

「ちょっと緊張するね……。」

「そうね……。」

それから一人は黙々と何も会話せずにご飯を食べた。

「で、高嶺の嫌なことつて……。」

「……。」

「「」あんね、言いくくいよね。」

「「」ひつちこそ、じめんなさい、自分が話題を出したのね……。」

さうに氣まずい空気が続いた。

特にそれ以外にしゃべることはないまま

高嶺は席を立ってしまった。

俺もそそくせとカツを平らげると

すぐさま食堂を後にした。

「高嶺くじこしか話す相手はいないか……。」

まだ一週間以上あるひで言ひのひ

こんなに焦るだなんて..

テニス部に所属していふ、他の女の子達は
どうやら俺の様子を気にかけてくれてるみたいだナゾ…。

「まじつたなあ…。」

どうも引っ込み思案な俺は、
なかなか一步を踏み出せない。

そこに桜井がやつて來た。

「おとといから大丈夫う？朝から溜息なんてついてたら、幸せ逃げ
ちゃうよ～？」

「ああ、『めんな桜井…。』

「深月ちゃんも心配してたよ？」

「どうして祇條さんが…。」

「えーっと、疲れてそだだから。」

「あ…寝てたの見られてたんだね？」

「うん？ そだよ？」

桜井はノートを差し出すと

俺の机に置いた。

「ちゃんととつておいてあるから、次の日までは好きに使つてね？」

「あ…ありがと、桜井…。」

「えへへ、どういたしまして？ ジヤあね城谷君？」

「ああ、サンキューな」

授業開始まで時間があつたので、

ノートを開くと、そこには小さなコメントが書いてあつた。

『深月ちゃんが放課後に話したい事があるんだって？』

俺はもう一度、祇条さんの方を見ると、

その表情は、黒い髪に隠れて良く見えなかつた。

放課後になつた。

俺は、部活に遅れると伝え、
急いで祇条さんのところへ走つて行つて、
机の前に立つた。

「城谷さん、『』話しづらいので、音楽室へ行きませんか?」

「あ…そうだね。」

午後の斜陽に照らされた教室を抜け、
祇条さんはつかつかと少し速歩きで音楽室へ向かつた。
ドアを開けると後ろに片付いた机と椅子が
ひつそりと静寂を招いて、恐かつた。

「今日、城谷さんにお伝えしたいのは、愛花ちゃんのことです。
ピアノに手を掛けてすくと背を伸ばした祇条さんを
暖かい光が包んでいた。

「ああ、高嶺、思い悩んでるみたいでどうしたのかつて…。」「
その事とは別の話もです。」

「え?」

「愛花ちゃんが思い悩んでる原因のほとんどは、私が持つて
いるんです。」

「それって…どういうこと?」

祇条さんは、それから少し黙つてしまつて
しばらくはその状態だったが
すうっと息を吸い込んでから
静かに口を開いた。

「実は、私、愛花ちゃんと小学校の頃からのお付き合いで、彼女は私の影響でテニスをなさっていたんです。」

「うん」

「それで、愛花ちゃんは中学校の時に初めてテニスをなさったのですが、私に一向に勝てず、苦しんでいらっしゃったらしいんです。」「そんな事なら祇条さんも…。」

「いいえ、私はこの学校のテニス部に入れませんでした。」

「祇条さんは、ピアノから手を離し窓の外を見た。

「男女混合ダブルスを日常茶飯事に行つなど、私のお父様には考へても見なかつたことなのです。」

「じゃあ…。」

「はい、結局私が勝ち逃げでもしたよつた感じになつてしまつたのです。」「やつなんだ…。」「

「でも…。」

祇条さんは俺の手を見つめた。

「愛花ちゃんは、私に一度だけ勝つた事があつたんですね。」

「じゃあ祇条さんは勝ち逃げなんて…。」

「いいえ、でも愛花ちゃんはその負けず嫌いに押し潰されて、私の右手を狙つてスマッシュショしたんです。」

「

「…そんな、」

「私は怪我で棄権して結局、愛花ちゃんが勝つたんですね。」「

「…。」

「本當は愛花ちゃん、そんな事なさらない真っ直ぐな子なんです。」「…わかってるけど…。」

「いまでも愛花ちゃんはその事を引きずつていらっしゃるみたいで、素直に勝ちに喜べなくなつてしまつたんです。」「

「だから、あんなに暗い顔していたのか。」「

「もう一つの事なんですけど……。」
袴姿をさせ、いつくつと頭を下すからまた俺に近づいて来た。

「愛花ちゃん、テニス部に入つてからは一切ダブルス大会にエントリーなさつていなうそなんです。」

「え? どうして…あんなに上手かつたら、お誘いへりへりにあつてもいいのに…」

「…ううなのですが、どんな勝ち方をなさつてもあまりお喜びにならないので、他の方からは完璧主義者だと思われてるよつて…。」

「そう…なんだ。」

「愛花ちゃんもご自分で他の方と距離を置いていらっしゃるので、それも原因なのでしょ?…。」

「確かに部活が終わつた後は独りで帰るし、他の部員とも寄り道はしないし…。」

「ええ、愛花ちゃんは規律をしつかりと守る子ですか?」

それからしばらく沈黙が続いたが、

祇条さんは俺を見つめて

何か言ひたそだつた。

「え…つと、私がお話すべき事はこれだけです。でも、この事を聞いたからと書つて安易に愛花ちゃんに近寄らない方がいいと思います。」

「え? どうして…?」

「愛花ちゃんはこの事を自分で解決したいんです。それに、必要以上の助け舟は彼女にとつてまたトラウマの種になりかねませんから。」

「そつか…難しいな。」

「でも道はある筈です。私も頑張つて見守りたいと思ひますから。」

「うん? 今日はありがとづ。モヤモヤが少し晴れた気がしたよ?」

「それは良かったです。では、私もそろそろお時間なので、城谷さんは部活、頑張ってくださいね？」

そうこうと

祇条さんはページと頭をさげて

音楽室から出て行った。

「もう言われても、どうしたもんかな…。」

俺はしばらく窓の外を眺めてからバッグを背負つて飛び出した。

高嶺に咲く愛の花⑨

「城谷君？」

「え？…あ、高嶺。」

部室の前で帚を握っている高嶺がいた。

「どうしたの？そんなに急いで。」

「いや、どうしてつて部活？」

「あれ？今日は部長が御休みだから、部活も御休みなの。聞いてなかつた？」

「うん…なーんだ、急いで損しちゃつたよ。」

俺が切れ切れの息を整えていると、

高嶺は帚を用具室に仕舞い、部室からバッグを持って來た。

「そうだ、高嶺。今日一緒に帰らない？」

「え？…いいけど、私なんかでいいの？」

「うん？高嶺がいいなら。」

「私はいいの…凄く嬉しい…なんて。」

「ん？どうした？」

「あ？その？『めんなさい』なんでもないの？…行きましょ？」

「ああ。」

今まで何度も高嶺と一緒に帰ろうと誘つて來たのに、いつも断られてばかりだったので、

お誘いを受けてくれるなんて思つても見なかつた。

「ねえ城谷君…。」

「ん？どうした？」

「えつとね…城谷君は下校中に寄り道したりする？」

「ああ、ゲーセンとかウイニングバーとか、後は駅前のお店に

寄る事が多いよ。」「

「そう……なんだ。」「

「そつか……高嶺は寄り道しないもんね。」「

「うん……。」「

夕焼けに染まる商店街のアーケードを抜けて河川敷を歩いた。

「なあ、高嶺……。」「

「何?」「

「高嶺がさ、嫌じゃなかつたらなんでも俺に相談してよ。」「

「え……その……」

「あ、ごめん? 出しやばり過ぎだよね……。」「

「うん……私、そういうのを人に頼るつていう事に疎いから……、誰

かがこじゅうやつて言つてくれるの、待つてたの。」「

「そつか、辛い時はお互い様?ね?」「

そういうと高嶺の顔が少し緩んだ。

「私、あなたに頼つてもいい?」「

「ああ、もちろんだよ。」「

「どんな事でも?」「

「う……うん。」「

「じゃあ……。」「

と高嶺は口籠つてしまはらく歩いていたが、ゆっくりとその口を開いた。

「私と日曜日に動物園に行つてくれますか?一?」「

「うん? ……つてええええ! ?」「

田曜日だ

「やつぱりそういう事だったのね。」

新とわの駅の噴水の前で、

俺は頭を垂れていた。

その後、高嶺は

「勉強の教え子の付き添いの下見。」
と付け加えた。

「決してそういう意味じゃ無いです。」
だそうだ。

「はあ……。」

俺がウジウジしていると

高嶺が駆け寄つて来た。

「城谷君おはよーーーう?」

「おはよう高嶺。」

高嶺は自分の私服にまだ慣れていないのか、
しきりに方の辺りをキョロキョロ見ていた。

「いい日だね、五月つて感じで。」

「ええ、とつてもいい天気。当口もこれくらい晴れてくれるとい
な。」

「そうだね、じゃあ行こつか。」

「はい?」

俺にとって、女の子とどこかに行く事は未知の体験だった。
例えそれが、下見の付き添いでも。

朝のモヤモヤした想いは今はもうとっくに消えていた。
ただ、それは高嶺と楽しくお出かけする事だからではなく、
高嶺の力になつてあげたいと思つたからかもしない。

「さてと、動物園に着いたよ。」

「はい？」

「どこ行こうか？」

「ウサギがいいです？」

「え…？ 高嶺つてウサギが好きななの？」

「あ？ ちつ違うの？ う…マリちゃんがウサギ好きなの？」

「へ…へえ…。」

「だ、だからウサギ？ ウサギ行こう？」

「はいはい…。」

半ば強引に高嶺とふれあいひまばに向かつた。

夢中になつてウサギを見つめる様は

とてもいつもの高嶺とは思えないくらいこの女の子らしかつた。

「ほら～皿ウサギ？」

「ははは… 餌に夢中で全然降りようとしないぞ？」

「可愛いね？ 城谷君？」

「ああ、なんだか面白い顔してるなこいつ。」

「ふふつ、口いっぱいにしちゃつて。」

高嶺のいつに無い素直な笑顔がとても眩しかつた。
そうして、俺達は夕方まで動物園で遊び尽くし、
帰途へつらつとした。

「城谷君… ちょっとといいかな？」

「え？」

「うん……あのね、」の後丘の上公園に行かない?…なんて
「別に構わないよ。」
「本当?」
「本当。」
「じゃあ決まりね?」

高嶺に咲く愛の花11

高嶺に誘われて、丘の上公園へ来た。

紅い夕陽は町を染めて二人を包む。

高嶺は一步前に出て、

手すりに捕まるとゆきりゆきと揺れるみなもを眺めてた。

「城谷君…。」

「どうした?」「

「…ダブルスに、」

「ダブルスに?」

「ダブルスでペアになつて欲しいの?」

高嶺の目は俺を見てはいなかつた。

「ダメ…かな?」

小さい肩をより一層竦ませて、高嶺は小刻みに震え出した。

「高嶺がいいなら…」

俺は一步踏み出して、手すりに手をつく。

「高嶺がいいなら、俺は全力で君とプレイしたい。」

「…城谷君。ありがとう?..」

高嶺の瞳が潤んだ。

「なあ、高嶺、一緒に帰らないか?」

「え?…いいよ。」

「今日は寄り道したつて問題ないもんな?..」

「うんつ?初めての寄り道ね…なんて。」

高嶺は手すりを離すと、

俺の前を歩き始めた。

黒い髪が左右に揺れて
なんだか胸が高鳴った。

「どうしたの？」

「あ、いや…何でもない、何でもないよ？」

「ふふ、先に行っちゃうよ？」

「ちょ…待てよ高嶺え！」

「ほらほら、ファイトー？とわのつ？」

「おい？いきなり走るなって高嶺？」

高嶺とそうしている内に
直ぐに商店街に着いていた。

高嶺に咲く愛の花1-2

とつあえず、俺達はファミレスへ入った。

「あのね、城谷君…。」

「ん？」

「私ってやつぱりお硬いよね？」

「ん…うーん、まあお硬いっちゃお硬いね…。」

「やつぱり、みんなは私がお硬いから、なかなか話しかけられないのかな？」

「そうかもね、でもわざと高嶺のいい所なんじゃない？」

高嶺はそっぽを向いてしまった。

それからじばらくはメニューがくるまであまり喋らなかつた。

「…私。」

高嶺は、アイスティーをストローでカラカラとかき回しながら口を開いた。

「私、城谷君にそう言つて貰えて嬉しいけど、変わらつと困つ。」

「そつか、俺も応援するからさ。」

「でも…私、自身なくて。」

高嶺の目はクルクル回る氷に行つていた。

「少しずつでいいじゃないか、急に変わるのは無謀だよ。」

「…そうよね、ごめんなさい。」

「…明日。」

「何？」

「明日、少し寄り道してみないか？」

「それは…その…速やかに下校つて…。」

「じゃあ、明日、“速やかに”少し寄り道してみないか？」

「う…うん。」

高嶺は少し俯き加減で俺の顔を覗き込んだ。

「よし?じゃあテニース部がよく行く「**ワイニングバー**」にしようか。」

「**ワイニングバー**?」

「ん? 高嶺、知らないのか?」

「し? 知ってるよ? **ワイニングバー**。」

「へえー、よく行くの?」

「う…うん。」

「…。」

俺は少し意地悪してみよつかと思つた。

「いやー、先々月のオリジナルバー? 最悪だつたよね?」

「オリジナルバー? エツと…。」

「あれ? なんて言つたつけかな? 名前出てこないや。」

「うつ…わ…私も忘れちゃつた。」

「んー…ほらキムチとビーフンを和えたような…」

「な…なんだつたのかな…?」

「高嶺。」

「えつ! ?」

「素直になれば?」

高嶺は燃えるように真っ赤な顔になってしまった。

「わざとからかつたの?」

「あはは? 高嶺の焦つた顔を見たら、テニース部の奴らもからかいたくなるよ?」

「もう? 意地悪なんだから?」

河川敷を一人で歩く。

とつぐに日も暮れた道に

街灯が光り、

小さく虫の音が聞こえた。

「私、自分からこうして城谷君を誘えた事が、ちょっと不思議に思えるの。」

「どうして？」

「とても優しくしてくれるから、私、素直になれたの……。」

「俺は高嶺の力になればいいってそう思っているよ。」

「ありがとう……。」

そう言って、高嶺は少し微笑んだ。

「まあ、一緒に帰ろうって言って何度も断られた事か……。」

「それは？ そう…だけど、男の子と一緒に帰るのって、その…恋人、みたい…なんて。」

「うつ…、そうか、そういう事に見られちゃうよね…」「めん」「めん。

「でも、一緒に帰り始めてやっぱりこうしている事が幸せに思えるようになつたの。」

「高嶺…。」

「は…恥ずかしいね？」

「まあね…。」

二人はまた少し距離を置いて無言になつた。

カツカツと靴が音を立てる。

高嶺の白いワンピースがフワリと風に揺れて、まるでスポットライトを浴びたヒロインの様に漆黒の髪の一本一本が光を返した。

「ねえ…城谷君」

「ん?」

高嶺はそう言いつと少し口籠つた。

河川敷の最後の街灯の下で、
高嶺が歩みを止めた。

「今日つてやつぱり、デートだったのかな?…なんて。」

薄暗い中で、高嶺は俺を見つめていた。
その目は少し戸惑いを持った。

高嶺らしくない目だった。

「あ…あの、ダブルス頑張ろうね?またね?」

高嶺は俺を残し走り去つて行つた。

「デート…だつたのかな?」

不思議と嫌な感じはしなかつた。

「お…おい、城谷の奴また酷い事になつてるな?」

月曜日の朝になつた。

俺の頭の中は昨日の高嶺の一言で、
大いに荒れ模様だつた。

「大丈夫う?」

「あ? ああ…。」

「腑抜けもいいとこだな…。」

「どうしよう? 城谷君が壊れちゃつたよ?」

「桜井さん… それは言い過ぎなんじや…。」

「でも…。どうしよう香苗ちやーん?」

「そんなこといきなり言われても…。」

三人は俺の席の周りでウンウンと頭を抱えていた。
すると、教室に入つて来た祇条さんがバッグを置くと、
勢い良く走つて來た。

「監さん、どうなさつたんですか?」

「あ…深川ちゃん、おはよう。」

「ほり、見てくれよ… 城谷の奴。」

「あら? …あの… 城谷さんを少し私に貸していただけますか?」

「別にいいけど… なにか心当たりもあるの?..」

「ええ… あ城谷さん立つてください?」

俺は祇条さんの言われるままに、
ゆっくりと立ち上がりつた。

「監さんは来ないでくださいね…。」

「わかった、ゆっくり話して来てくれ。」

「はい…。」

学校の壁伝いに音楽室まで行くと、
祇条さんはドアを開めて、
俺を椅子に座らせた。

「お話しした時から一週間も経つていなこですよ?」

「う…あつと、違うんだ…。高嶺から俺を誘ってくれて。」

「え?あ…あえつと…そうでしたか、私でつき。」

「いいのさ、腑抜けになつた顔をしてたら最悪の事態を考えるよ誰
でも。」

「すみません…それで、愛花ちゃんはなと…言つてひしゃつたの
ですか?」

「それが、お硬いのは自分の性だから変わらなきやつて。」

「愛花ちゃんが…ですか?」

「ああ、どうやら高嶺には高嶺の考えがあるみたいで。」

「やうなんですか…。」

祇条さんは少し戸惑つてはいたが、

いざれまた愛花ちゃんも壁に阻まれる事があるから、
助けてあげてくださいこと言つて出て行つてしまつた。

祇条さんはたぶん、高嶺があれ以上ネガティブになる事を恐れているんだ。

だけど高嶺は高嶺で自分から変わりたいと願っている。
俺はその中間でフラフラと彷徨つている。

祇条さんの言うとおりに秘密にしておくべきか、
高嶺の希望のままに全てを知っていた事を話すべきか。
俺は悩んでいる。

「かと言つてまず最初は高嶺のお硬い雰囲気を解くような行動を…。」

俺は体育着を着て校庭の片隅で一人思い耽つていた。
すると、どこからともなく女の子の声が聞こえた。

「あぶなああああああい？」

「え？」

猪突猛進と言わんばかりに

足が絡んで転びそうな少女が目の前に現れると、
彼女はなんの躊躇いも無く、俺にのしかかつってきた。

「いつててて…。」

「またやつちやつた…『ごめんね？ 怪我は無い？』

「大丈夫だよ、君は？」

「あたしは大丈夫？ 慣れっこだから。あたしは咲野明日夏？さつき
はごめんね？」

「いや、心配すんなつて、俺は城谷信一。何をしようとしたの？」

「ああ、アスカターン？」

「アスカ…ターン？」

「そうだよアスカターン？ ゴール前で敵の壁を惹きつけるターン何

だよ？」

咲野さんは白慢氣に胸を貼つた。

「アスカターン…アスカターン あ? これなら? ありがとう! 咲野さん?」

「うん? またねー」

「これだ? アスカターン?」

高嶺に咲く愛の花16

放課後になつた。

高嶺と俺は手塚部長にダブルスのエントリーをして来てから、二人でウイニングバーへ向かつた。

「さてと入るか。」

「う…うん。」

「いらっしゃいませーつ？」注文はお決まりでしょうが？

「あ…つとハンバーガーを…一つ」

「オリジナルバー ガーをお一つ、御一緒にドリンクは如何ですか？」

「じゃ…じゃあ、お紅茶」

「アイスティーですね？ セットで頼むとサイドメニューがついてさらにお得になりますが以下がなさいますか？」

「あの…城谷君お願い？」

高嶺が涙目で訴え掛ける。

「うえ？ む、おひ…じゃあウイニングセットを一つで「一ツ」とアイスティー、高嶺？ ポテトとサラダ、どっちがいい？」

「そ…サラダがいい」

「じゃあどっちもサラダで。」

「は…、じ注文を…。」

高嶺つてやつぱつといつぱつのに弱いんだけど
よくわかつた瞬間だった。

それから、相席でハンバーガーを食べていると隣から聞き覚えのある声が聞こえた。

「城谷君だ？ こんな所で会うなんて奇遇だね？」

「そ…咲野さん！？」

「あ、もしかして放課後バーって？」「

「いやーその…。」

「あ、良く見たら、同じクラスの高嶺さん？」

「はー、高嶺愛花です？」

「咲野明日夏です、よろしくね～じゃあ部活の人と一緒にやりたいだけだからじやね？」

咲野さんに誤解されてこらみつけられ、
高嶺は全く気にしていないかった。

「なあ高嶺、イメチョンを兼ねてや、俺がひとつと考えてみたんだ。」「え? どういつ事?」

「ほら、高嶺つてさお硬い雰囲気から脱出したといつていつていつたろ?」「…ひん。」

「きつちつしたイメージの高嶺がわちよつとかわい子ぶつて見るのも有りかと思つて。」「ど…どうするの?」

「もうだな…こんなのはビリだ?」「…」

俺は少し考えてみた。

「もうだ?」「う、コオ? つて話の前にいつてみたり…。」「…ひーん。」

「じゃあさじやあせ、アスカターン…つじやなくてマナカスマーツシユなんてや。」「変かな…。」

「うーん…小キック?」「小キックつて何?」「あえつと…ああああもう、じゃあこれだ?」

俺は左手でピースサインを作つて顔の横に持つてくる。

「オッス愛花だよ?一緒に帰る?」「…無理。」「…」

「えー、高嶺がやつたら大受けだつて?」「は…恥ずかしいよ」

「まずはものの試しでやつてみたひつだ?」「つ…うんじやあ。」「…」

真っ赤になつた高嶺は

ピースサインにした左手をゆっくりと顔に近づけると少しうつむき加減で口を開いた。

「お、オッス愛花だよ？　いい……一緒に帰ろう？　なんて……」

恥じらいに潤む高嶺の田に

俺は釘付けになっていた。

「なにか……言つて欲しい。」

「あつと……その……ダメだ可愛すぎる。」

「え！？　そ……そんなの、その……恥ずかしい。」

「ふふ……あはは、あはははは？」

「ひ、酷いよ？　頑張つてやつたのに？」

「だつて？　可愛すぎるんだもんあはははは？」

「だからつて笑わなくとも？」

「はあ～はあくつふふふ…。」

「もつ…知らないんだからつ？」

「あひょつとまで高嶺？…行つちやつたか。」

後々これが大いなる事件を引き起しそうになるとは思つても見なかつた。

高嶺とダブルスを組んで数日後の事だった。

試合を明日に控え、他の部員も練習に打ち込んでいた。もちろんそれは俺達も例外ではなかった。

「ほらちゃんとボール見て？」

「わかつてゐよ？」

「後衛はしつかり守つて貰わないとダメなんだからね？」

「くつ？ 高嶺？ だからって両端狙わなくても？」

「まだまだ？」

「おおいフェイントとか酷いだろ？？」

続いていたラリーが途切れ
ボールは後ろへと転がってしまった。

ポテポテと鈍い音がテニスコートにヤケに響いた。

「今日は終わりね。」

「ああ、明日頑張ろうな？」

「うん」

高嶺はリボンを解くと
解き放たれた髪が、

不思議といい匂いを放つた。

サーっと風に靡いた髪を見ていると

高嶺が顔を覗き込んだ。

「顔に何かついてるかな？」

「え！？ あ、違う違う？ 何でもないから。」

「ふふつ、変なの。」

「普通だぞ…。」

「だつて顔が真っ赤だよ？」

「うえ！？だから？その？…。

「ふふっ一緒に帰ろう？」

「

高嶺の柔らかな口元は

いつもの様に微笑んでいた。

「私…どうしたらいいんだら?…。」

城谷君はいつも私に優しくしてくれることで、私はぎこちない答えしか出せない。

止め処無く流れるシャワーがいつもより痛く感じる。

悲しいの…。

自分がなんだかわからなくなつて来る。
胸が苦しい。

貴方に見つめられてからずつと、
「怖い…私、貴方を失うのが怖い…」

あんなに楽しく、

私が笑顔で居た時間の数だけ

私はその思い出が弾けて消えるのが
とっても怖い

貴方にとって私は

どういう存在ですか?

私にとって貴方は

まだよくわからないんです。

たぶん貴方もそうなのかな?
まだよくわからない存在

これからもつと貴方といつしょに居たい。

私は私が幸せになる事を

単に勝ち負けで決めていたのかもしれない。

深田ちやんとのトラウマ

これをちゃんと解決したい

あの日、私が犯した罪を裁いてもらいたい。

「私、強くなれたんだよ…貴方が笑ってくれるから。…城谷君」

私はシャワーを止めて
バスタオルを手にとった。

「ねえ、変な質問していいかな?」

「ん?」

リボンを付けない濡れた髪の毛が
少し湿っぽい風に揺れながら

高嶺と俺はいつも通学路を歩いた。

「別に構わないよ、俺が答えられることなら。」

「ふふ、ありがと。あのね、城谷君は私の事ビビりついたの?」

高嶺の唇からこぼれる息が

肩にのしかかる様な気持ちがあつた。

「…高嶺は…」

高嶺は…、高嶺は俺にとつてのなんだ?

高嶺は友達だしテニスの仲間だしペアでもある。
だけど

「高嶺は俺にとつての…」

「…なさい…。」

「え?…」

「じめんなさい、いきなりこんな事訊いて…城谷君も迷っちゃいつ
ね?」

「あ、あの…」

「私もわからないの…城谷君は私にとつての何なのか。だから訊いてみたかった。どうすればいいのかわからなくて…。」

「…高嶺、」

高嶺の肩が震えた。

どうしてだろう

心が罪悪感で満たされていく。

俺は高嶺をどう思つているなんて考えた事も無くて、
高嶺を気にしていた癖に、俺が一番高嶺を見てあげていなかつたじ
やないか。

「高嶺…『めんな…俺が、俺が』

「城谷君…私、」

不意に俺にかかる風を感じた。

俺の胸に、柔らかい圧力があつた。

「高嶺…」

「怖いの…自分を変える」ことが怖い…過去を引きずつて幸せになる
のが嫌なの…！誰もいなくなつちゃうのも嫌なの…城谷君…私…

「…高嶺、高嶺は俺の…。」

俺の決意は高嶺の涙に搔き消されて、おそれらへ高嶺には聴こえなか
つた。

本当に高嶺は変わらうとしている。

徐々に湿つてゆくワイヤーシャツの暖かさが

俺の鼓動を速くした。

高嶺に咲く愛の花21（前書き）

どうもこんにちは、作者の f a f u n a r v です。
ええ、停滞していたことお詫び申し上げます。

なんで出て来たんだよって言うとですね、次回ヒロインの投票について

また懲りずに宣伝しに来た訳です。

えー

ただいま、アマキス・プラス+では次回のお話で書いて欲しいキャラを投票形式で大募集中！！

一人持ち票を三票として、次回のお話で書いて欲しいキャラの後に何票入れるか感想欄にご明記ください。

一番多く票を集めたキャラを順にお話を書いて行こうと思います。
(決して感想を貰つて知名度を上げたいとか作者のヨコシマ作戦ではないので、ドシドシ投票お願いします！！)

よくわからない人は高嶺愛花編16話17話の前書きみてくださいね？
ではグッバーアイ

「泣くと結構スッキリするね。」

「そうか、少しあは力になれたんだな良かつた良かつた。」

高嶺は近くの公園で腫れぼつたい泣き顔を一生懸命洗いながらそう言った。

変わらうとするのがとても怖いと高嶺は泣いていたけど、本当に怖いのは変わった後のはずだ。

オツス愛花だよ作戦も、決行する時によつては思わぬ逆効果を發揮しかねない。

元は俺が始めたんだが…

「ねえ、今日は何処に行こつか?」

「寄り道も板に付いて來たな。」

「こういう事つてなんだか昔やらなかつた分、ぶりつかえしてゐたいで。」

「はは、そうかじやあゲーセンでも行くか?」

「え? ゲーセン…つてゲームセンター?」

「ああ、嫌か?」

「ちょっと怖いかな…なんて。」

「大丈夫大丈夫、この時間ならヤヴァイ人いないし。」

「うん、ものは試しだ行こう行こう!…」

高嶺は苦笑いしながらも

嬉しそうにくつついて來た。

ゲーセンには高校生が沢山いて、見るとテニス部の部員までいる。

「すごい…キラキラしてるね。」

「まあね、初めてだと目が疲れちゃうかもね。」

「うん、でもちょっとうるさいかな…。」

「そつか、じやあ今日は音ゲーはなしにしよう。」

「音ゲー？」

「ああ、音楽ゲームだよ、CONAMIのポップスミクージックつて言ひのをよくやるんだけど、今日は格ゲーに変更だな。」「格闘ゲームだよね？私も小さい頃、近所の男の子がやつてるの見たことがあるよ。」

「おおそれなら話が早いな。よつと…」れにするか。

「人がやつてるんじやないの？」

「はは、今は反対側の台でやつてるんだけど、いつかの金をお金を入れると…。」

『HERE COMES A NEW CHALLENGER!!』

「つでね、勝負を吹つかれらるんだ。」

「へえ…。」

俺はいつもお面の侍のキャラを選ぶと、相手の赤い服の大剣使いとのバトルが始まった。

「城谷君…頑張って。」

「お…おひ…」

高嶺はたかがゲーム画面を食い入る様に見つめていた。

「とりや…！」

「せいや…！」

「いつけ必殺…疾風…！」

とまあ圧勝して高嶺に良いとこを見せる事が出来た。
「城谷君す”ーー、このキャラを使いこなしてる。」「まだまださ、もつと強い奴はいっぱい…」
と勝者面でかつこよく決めようとしたのに、
今度は向こうから吹つかれられてしまった。

「もーーあんた情けないんだから、あたしにかかれ巴チョイチョイよー！」

「薰…結構強いぞ相手。」

「うつさいつわね、わかってるわよーー！」

なんだか向こうが騒がしいが

そういうしているうちにまたバトルが始まつた。

またあの赤い服の大剣使いた。

今度は色を変えて緑色になつていて

「城谷君、もう一戦するの？」

「ああ、吹つかれちゃつたらどんなバトルも最後までやり遂げないとな。」

と逃げの口実を作つておいて

バトルが始まつたが

あつという間全部片付いてしまつた。

「負けちやつたね…」

「ああ、それじゃキリも良い所だし帰るか。」

「うん、でも次は私もやつてみたいな…なんて。」

「そつか、じやあその時はしつかり鍛えるからな？」

「ふふ、お願ひします。」

日曜日

ダブルスの試合当日は晴れ渡っていた。

「高嶺、よろしくな?」

「はい……よろしくお願ひします!…」

高嶺と俺は自分達でも上手こと言えるくらい上手な攻防を繰り広げた。

俺は高嶺の力バーに徹し、高嶺は相手から点を奪つて行つた。完封勝利を連発する俺達を止めるものはいなかつた。

準決勝まで上り詰め、ついに俺達は三年生のペアとの対戦が始まろうとしていた。

「ナイス高嶺!…」

「うん!…ファイトファイト!…」

二人が交わすハイタッチ、これで何回目だろ?か
一緒にベンチに座り、一息ついていると高嶺のクラスメイトだろ?か、

茶髪のそばかす少女がやつて來た。

「高嶺つよいじやーん、もちろん、ペアの子も強いけど、私ダメダメだったなあ」

「あ、英子ちゃん、彼が前言つてた城谷信一君だよ。」

「初めてまして、城谷です。」

「よろしくね、私、三好英子!…高嶺のクラスメイト。」

「ああよろしくな?」

「でさでさ、高嶺が最近城谷君がねー城谷君がねーって話すからどんなもんだと思つたけど…」

俺は口にしていたスポーツドリンクを吹いてしまつた。

「ありやー、高嶺があんたの話してるって聞いて照れてるんだー。」

「もう英子ちゃんからかわないでよーーー！」

「ふふ、おー一人で”ゆつくじ”ひがーーー」

真っ赤な顔になつた高嶺がいた。

口をモゴモゴさせて、何かいいたそつだつた。

「よ…良かつたじゃんか高嶺？」

「ふえ！？あ…あはあはは…」

「友達出来て良かつたな…それなら、テニス部のヤツらだつてきつと高嶺の友達になれるさ。」

「…城谷君。」

「少しずつでいい、俺が側にいるから絶対諦めんなよな。」

「ふふ、はい！…」

「よしつ…—どんなバトルでも最後までやり遂げるのが筋だ！！行

くぞ高嶺つーーー！」

「オッス！—」

高嶺の目はいつもと何か違うような気がした。

準決勝のハイスクールがテニスコートに響き渡つた。

「やり遂げたよな…。」

「しようがないよ良く頑張ったから。」

「ありがとう高嶺、足引っ張ったのは俺なのにな、はは…。」

「だつて相手は部長ペアだつたし。」

俺達はベンチにへタレ込んでいた。

完封負けだ。

手も足も出ないままあつさうと。

しかし高嶺は笑っていた。

いつも負けた時は悔しそうな顔をする高嶺には似つかわしく無いくらいに満面の笑みだつた。

「私、やつとわかつた。」

「ん? どした…。」

「負けて悔しかつたけど、最後まで全力でやり遂げる事がこんなに気持ちいい事だなんてわからなかつた。」

「そつか、俺は高嶺とペア組んで一週間、そっちの方が楽しかつたぜ。」

「え? ……あ、うん。ありがと…。」

高嶺は俺の肩に頭をもたれかけると

無言のまま部員が集まるテニスコートを見つめていた。

やつぱり女の子なんだと思えるような、

甘くいい香りが一人を包んでいた。

高嶺の小さな手に、さりげなく自分の手を重ねた。

高嶺の暖かさが伝わる。

不思議な気持ちだった。

高嶺に対するこの気持ちは
強くなるばかりだ。

「城谷君…。」

「ん?」

「城谷君にね、もう一回抱きしめて貰いたい…。」

「高嶺…。」

「今日、みんなにアレやつてみる。」

「…本当に?」

「うん、だからもう一度抱きしめて。」

俺は高嶺の肩を引き寄せ、
その不安を俺が少しでも拭つてあげたい一心で
強く高嶺を抱きしめた。

夕方

日が傾き、部員達は着替えながら打ち上げの話で盛り上がりっていた。

「なーどいする？もんじゅの隅田川にすつかーー！」

「えーメンラー行こうメンラーーー！」

「なあ、城谷の為の打ち上げだぜーーー！城谷に案を言つて貰えよーーー！」

「俺か？うーん、ファミレスのデキシーズでいいんじゃない？」

「さっすぐだぜーーー！デキシーズ、女子も行くんだってよーーー！」

「マジかよー合コン状態じやんか！？」

「よーしそうと決まればペアの子を落としてやんぜーーー！」

「おーいきり立つてんなあ、俺もそうすつかな。」

「城谷のペアは…高嶺か、残念だつたな、今日も来ないだぞ。」

「はは…わかつてゐつて。」

高嶺にまだそんな見方が植え付けられたままのは少し恥ずかつたけど、

俺はこれから起る衝撃的な事件を田の当たりにして、「こりらが驚く様を想像して笑つてしまつた。

いち早く部室を出ると、

高嶺が校門で待っていた。

「あ…城谷君。」

「高嶺、頑張れ、俺が応援してるから。」

「うん、ふうーーー…」

「ほら来たぞ。」

「えあつ…み、みんなーーー！」

「え？高嶺？」

「愛花ちやんじゅーんめひずりしーな

「あの…その…。」

呼び止められた部員達は
高嶺から声をかけたのが珍しかったのか、
ジッと見つめていた。

「あの…おっ…オツス愛花だよ…一緒に帰りつつ…テヘ?」

高嶺はもう顔から火が吹き出る様で

決めポーズを取りながら固まってしまった。

「高嶺…かつ…可愛い…」

三好さんが叫ぶと男子も女子も

高嶺の周りに寄ってきて、

それはもう弾け飛んだかのようなお話責めになってしまった。

「良かつたな高嶺。」

「うん、城谷君のおかげね。」

ヒシリと笑顔を浮かべて

半泣きの高嶺と共に

打ち上げに向かっていった。

高嶺に咲く愛の花25

打ち上げの後はなんだかんだでペアの人と過ごすだのと言い始めた奴がいたので、

高嶺と俺は一人きりで夜の街に繰り出した。

「ね、今日もゲームセンターに行かない？」

高嶺は嬉しそうにこちらを覗きこんだ。

「いいよ、今日もコテンパンにやつけてやる！…」

「あ…それなんだけど、私はやってみたいなって…。」

「おっ！…高嶺やるのか！…」

「うん、よーし頑張るぞーなんて…。」

高嶺は五百円を五百円に崩すと

昨日いた台に座った。

ちょうどだれもいなかつたみたいで

コンピュータとの対戦が始まつた。

高嶺は見た目で選んだのか、

白装束の羽根の生えた帽子を被つた少女をえらんだ。

「したにコマンドの入れ方が書いてあって、このこの表を見ればこのキャラの必殺技になつてるから。」

「う…うん。」

高嶺は一生懸命コマンドを入れて必殺技を連発させていた。

空中から相手に突つ込んだり、

アッパーをかけたりと、三回戦目で早くもこつを掴んだのが、

ノーダメージで相手を倒した。

「凄いぞ高嶺！…」

「…」

「高嶺？」

7

「高嶺さん？」

1

高嶺はもうゲームだけに目が行つてゐるよつで、

全く話を聞いてくれない

俺は仕方なく反対側の台にお金を入れると高嶺をやつづけてしまった。

「あれ？ 城谷君！？ 城谷くーん！…」

必死になつて俺を探していた。

卷之三

「話聞かな」から

— よし望む所だ！！

次の日、

祇條さんに呼び止められた。

「城谷さん、愛花ちゃんが私ともう一度テニスがしたいこと言つてくださいました。」

「そりなんだ、昨日?」

「はい、お電話いただいて、是非次の日曜日に私の別荘でやりますとお返事致しました。」

「べ…別荘ねは…いいなあ。」

「あ、その件なのですが、城谷さんも」一緒にただきたくて。」「え?俺も?」

「はい、城谷さんに見守つていて欲しいと愛花ちゃんは思つている筈です。」

「そつか、そつか事なら俺でよければお邪魔をせてもいいよ。」「はい、お待ちしています!…!」

そういうと祇條さんはペコリと頭を下げて席に着いた。

「なんか良い雰囲気だね、城谷君。」

「桜井…俺はそんな見方してないだ?」

「違うよーーー高嶺さんと城谷君だよーーー!」

「え?そ…そつか?」

「うん…オッス梨穂子だよーーー一緒に帰る?」

「ブツ!…!」

桜井がオッス愛花だよを知つているつて事はもしやテニス部の誰かが漏らしたんだな!?

「どうしたの城谷君?」

「桜井…それ誰に教わったんだ?」

「棚町さん！…」

「…た…棚町つてああA組の…どうじょ…！」

「うーんとね、テニス部の友達がいて、その子がやつてたから真似したんだって…！」

「やつぱりテニス部かよ…！」

「で、さつき高嶺さんが廊下で待つてたよ…！」

「そつちを早く言つてくれよ桜井…！」

ドアを見ると

高嶺が手招きをしていた。

「「めん高嶺…今行く今行く…！」

高嶺は俺の手を取ると

こう切り出した。

「私ね、全部ケリをつけようと思う。」

「わかつてる。もう全部知つてるから大丈夫。」

「え…じゃあ。」

「過去の過ちを取り返してくるんだろう？」

「うん…。」

高嶺はフツと胸に飛び込んだ。
数秒で離れてしまつたが、

高嶺の目からは戸惑いが消えていた。

高嶺に咲く愛の花27

その一週間は高嶺のカマしたオツス愛花だよがとてつもなくブレイクした。

高嶺の顔からは自然と笑みがこぼれ

毎日はとてもゆっくりしたペースで流れた。

「オツス愛花だよー！」

「よう高嶺、今日も一緒に帰るつか。」

「うふーーー！」

高嶺は今日はどんな人といろんな話をし

どういう発見をしたとか、今度はどこに連れて行つて欲しいとか
熱心に俺に語つてくれた。

その度に駅前のトースやデキシーズといったファミレスから

ウイニングバー ガーだの学校販売だと

高嶺と俺の時間はますます増えて行き、

その度に高嶺は明るくなつた。

「今日は、思い出の場所によつて行こう？」

「ん？まあいいよ。」

「ふふ、ちょっと遠くなるけどいいよね。」

「お硬い高嶺様には珍しい。」

「んもうーー速やかに寄ればいいんだもん。」

「へいへい。」

商店街を抜けて丘を登り

あの日見た丘の上公園のあの景色に辿りついた。

「覚えてる？」

「ああ、覚えてるさ。」

俺たちにはそれだけで良かつた。

動物園の帰り道

高嶺が俺にダブルスの誘いをした日
覚悟を決めた高嶺の顔を
俺は今でも思い出せる。

高嶺は静かに俺に寄り添つた。

フワッと良い香りがして

第一ボタンまで開いたワイシャツの中に
高嶺の髪の毛が入り込む。

「城谷…君。」

頬が触れ合い

徐々に高嶺の顔が近づいて来る。

熱い吐息が絡み合い

二人は静かに唇を重ねた。

まだぎこちないキス

二人は口を離してから見つめ合い
何も言わずに帰り道を歩いて行つた。

影法師の距離が

何時もより遠く感じた。

田曜日だ

祇条さんの別荘に招かれ

俺たちは大きなテーブルを囲んで食事をしていた。

「城谷さんに愛花ちゃん、今田は私の別荘に御来訪くださいましてありがとうございます。」

「私が誘つておいて別荘借りるのも申し訳ないから、でも嬉しい。」

「ああ、ありがとうございます。俺も招いてくれて嬉しいよ。」

「はい、ではお食事がすみましたらどうぞお庭に来てください。」

祇条さんは部屋を出て行ってしまった。

高嶺もご飯が済んだのかかけまとも言つて更衣室に入つて行つた。

「城谷様、殿方のお召し物の更衣所は左でござります。」

「ありがとうございます。」

メイドさんはそういうふうとさへと出て行ってしまった。

仕方なく俺は着替えをする為に更衣室に入つて着替えをしてから急いで庭へ駆け出した。

そこで、高嶺と祇条さんはすでに試合を始めていた。

続くラリー

鮮やかなスマッシュ

それを打ち返してなおの粘り

二人とも互角に闘い

あの高嶺でさえゲーム一つ取るのもやつとだつた。

1 - 1で迎えた最終ゲーム。

試合は両者譲らない白熱した闘いが繰り広げられていた。

デュースに持ち込み

二人のアドバンテージ争いが始まった。

高嶺がアドバンテージを取ると

祇条さんが阻止して

祇条さんがアドバンテージを取ると

高嶺が阻止した。

三十分続いたアドバンテージ争いは6回目を迎えた。

「えい！…」

「そりや！…」

高嶺のアドバンテージ

祇条さんの一瞬の隙を高嶺は見逃さなかつた。

「えーーい！…マナカスマーーーッショ！…」

高嶺渾身の一撃がコートに叩きつけられた。

パンツ！！

と激しい音と共に

ボールは宙を舞つた。

「ゲームセット！…カウント2 - 1 !…マジチウォンバイ！…高嶺

「……」

高嶺がコートに突つ伏した。

祇条さんはただ笑いながら高嶺に寄り添い

過去のトラウマを振り切った高嶺のか細い体を抱きしめた。

「高嶺、頑張つたな。」

「城谷君… 私い

「泣くなよ高嶺、いいじゃんか笑えよ。」

「うんっ！！」

高嶺のあの時の笑顔を俺は忘れない。

高嶺に咲く愛の花 フラワ

「ハアハアハアハア…。高嶺…！」

「オツス…。し、城谷君…。」

「うえーいヒュッヒュー。」

「熱いね色男～。」

「高嶺、頑張りなよ、んじやこいつら連れてくからさ。」

「う…うん。」

「つたぐ、なんなんだよあいつら。で高嶺、話つて…。」

「えつとね、城谷君…。ひち来てくれない？」

「いいから、ね。」

「つたぐう。」

「ふふっ…ねえ覚えてる?..」

「ああ、初めて会った『ミミ箱前だな。』

「もう酷いよ城谷君、『ミミ箱が初めて出逢つたトコなんて言わないで。』

「じゃあ掃除用具箱の前ね。」

「んーっ…。」

「悪かつたよ…、俺がなテニス部の入部届けを高嶺に渡したトコな。」

「…。」

「まだ怒ってる?」

「…怒つてないよ、あのね」

「ああ、」

「あの…ね」

「…。」

「私、今日英子ちゃんに告白するからって言つたんだけど…。」

「え? 高嶺つて三好さんのことか…。」

「ううん… そういうのじゃなくて、私が貴方に…。」

「私は貴方を好きつて。」

「高嶺…。」

「私、そう言いたかった。ずっとずっとそういう言いたかった。」

「高嶺…俺が前に高嶺に言つたことたぶん聞こえてないと思つたけど
や。」

「うん。」

「あの時俺は高嶺は俺の大好きな人だつてそう言つたんだ。」

「え…じやあ」

「高嶺：大好きだよ。」

「うん！…信一君！…ずっとずっと私のパートナー…！」

つとまあ、高嶺愛花編お楽しみいただけたでしょうか？

次回は作者がやりたかった悪ノリを挟んで棚町薰編スタートです！！！
随時キャラ投票を行つていますから
どうぞご参加よろしくお願ひします。
では次回またお会いしましょうーー！

次回予告

「オッス薰だよ!!一緒に帰ろう?」

「あー、棚町さん!!ネタの横取りはダメですよ!!」

「おー!愛花ちやーん彼氏君とハッピーハンドかーイイなあ。」

「そ...そんな」

「ま、あたしもちよび-----とお邪魔させて貰つたから
いいつかな。」

「え?でも次回は棚町さんのお話ですよ?」

「え?えええええええええ?マジ?..」

「はい、マジです。」

「どうしようつ...私どんなストーリーてくれるのかなあ...。」

「作者さん次第ですよね。」

「やつよねえ、まあそういう事で次回棚町薰編、頑張るわよー!!」

男主人公たちの詳細プロフィール（前書き）

この章ではキャラクター達の絡みを重視した短編ストーリーを載せて見ました！！

甘つたるい恋物語のスペイスになれば幸いです。
まずは設定資料公開から。

男主人公たちの詳細プロフィール

橘 純一
組順です

クラス：2年A組

部活：なし

誕生日：12月14日

星座：射手座

家族：父・母・妹

通学手段：徒歩

年上好みで、高いところが苦手。

主にアマガミのメインキャラクターのお話を担当。
一人称は「僕」。

2年前、告白した女の子からクリスマスデートの約束をすっぽかされて失恋したという苦い経験があり、それ以来恋愛やクリスマスに対する苦手意識を持つている。

自宅の押入に蛍光ペンで書き入れた自前のプラネタリウムを持っており、ひどく落ち込んだ時にはそこへ引き籠もある癖がある。人目に付かない校内の未使用室を隠れ家として「お宝本」を秘蔵している。

また、ゲームや漫画好きで、放課後はしばしばゲームセンターを訪れ、妹が持つ少女漫画も愛読している。

妹の美也に対しては、色々と手を焼きつつも結局甘やかす事が多い。

城谷 信一

クラス：2年B組

部活：テニス部

誕生日：4月6日

星座：牡牛座

家族：一人暮らし

通学手段：徒歩

自炊を始めとする家事全般を卒なくこなし
遅刻や欠席の目立たないが頭は中位。

一人称は「俺」。

弁当を持つ事は少なく、学食を頼る事が多い。
主にラブプラスのキャラクターのお話を担当する。
お兄ちゃん肌でしつかりものようで、
実はあまり人の気持ちが理解出来ない。

その為、後先考えず行動する癖に対した結果がついてこない。
人の勧めを断れずにズルズル掛け持ちまでしてしまった。
包容力があり、困っている人を助けなくては気が済まない。

相原 光一

クラス：2年C組

部活：なし

誕生日：8月22日

星座：獅子座

家族：父・母・妹

通学手段：徒歩

まだキスの味も知らない少年。

主にキミキスのメインキャラクターのお話を担当。
一人称は「僕」。

夏休みが終わり、高校生活もあと半分を迎えた事と、恋愛もせずに卒業してしまう事に危機感を持ちながらも、一步踏み出せないでいる。

お弁当などを持参する事が多いが、学食に顔を出す事もしばしばある。

ここぞという時の決心が付かずに優柔不斷な状態に陥りやすい。

妹の菜々からは強いアプローチをされる事もあるが、スバルタ教育

を強いることが多い。

草壁 総一

クラス：2年D組

部活：なし

誕生日：10月28日

星座：蠍座

家族：一人暮らし

通学手段：電車

一年生からの転校生で不思議な空気を醸し出す。

担当タイトルは未定、サブキャラやオリキャラのお話を担当する予定。

有名私立高校からわざわざ転校してきたが、

その意図や動機は不明。

栗生恵の場合

「おはよう栗生さん！！」

「おはなう相原、今田はちやーんと遅刻しなかつたなよかつたよかつた。」

「ああ、でござ栗生さん!」

「あ、ああ……。」

「」の不順異性交遊男めーーーー
「んじゃーーーーーあーーーー

人にはやあ！！

桜井梨穂子の場合

卷之二

「梨穂子か、ちょっと梨穂子に会おうと思つてな。」「? 私? 」

「热身」

卷之三

「ペアですか？」

祇条深月の場合

「祖孫さん！！熱海旅行へアチケットが当たったんだけど、行かな

「あ、相原さん。熱海旅行ですか、確かあのホテルのスイートがとつても…。」

「僕にフレッシュナーをかけないでくれ……。」

二見英理子の場合

「何相原、私に用？」

「ああ、熱海旅行ペアチケットが当たったんだけど、一見さんと熱海旅行に行きたいなつー。

「三つ子」

「え？ 本当？」

「その代わり、何かあつたら貴方の自己責任よ。」

第三回

絢辻詞の場合

「絹造さん、ちよつと話があるんだけど。」

「何よ… 手短にしなさいよね。」

「はいはい、熱海旅行ペアチケットが当たったから一緒にい……」

「おおこちねむねーーー！」

美也と英理子の三分クッキング

「みやーと！」

二見英理子の...」

三分ケツギンケ!!!

卷之三

「そうね、次回も貴方はともかく、私は無さうだから口々で宣伝

「うん！！みやー達最初の企画は先輩と一緒にクッキングすることなんだつて。」

「ネタに走るだけと思うけど私たちは全力でやりましょうね。」

「お、先生！！でも、今日は何を教

今田は口ノリヰサヘツを作るれ

え？先生、ロールキャベツって手間がかかるじゃないですかー」

〔 〕

「アーティストの心」

一見先生はフライパンに油をひき、キャベツと豚肉を手にとった。

「じゃあ、焼いていくわよ。」

一 はおゝ：本格的：

リ川ギャヘッスはわざわざギャヘッスに真木を巻くから手間かかる

二〇〇九

卷之三

そう言つと一見先生は水を入れて蓋をした。

「ほえ？蒸すの？」

「そりよ、少し蒸すと美味しいの。」

「ぐはー。」

かくして

味音痴先生と壊滅的アシスタントの料理は続く。

「ここに隠し味で豆板醤を入れるわよ。」

一見先生は豆板醤の蓋を開けると

これでもかと豆板醤を叩き込む。

「美味しそうだね先生！！」

「そうね、あとは煮込めば出来上がりよ。」

完全にロールキャベツの原形を失つたそれは
そう兄、橘純一の部屋に運ばれて来た！！

「ここ……みやーと一見先輩の力作だよ……食べて……」

「遠慮しなくてもいいぞ橘。」

「うえ……む……おひ。」

橘は恐る恐る箸でキャベツと肉を掴む。

「えーー、ぱくつーー！」

「どう？ここに？？」

「どう？橘？」

「うん美味いーー！」

「本当ーー？」

「ああ本当に美味しいよ」のホイローーーーー。」

えー

俺がですね、このアマキス・プラス+を書いている時の裏話つす。

ちょうど15話くらいを書いている時に

まあふと投票企画を思いついたわけで、

わざわざ16話前書きに記載した所一つしか投票されていない事に愕然としましたね。ええ…

本気で次回ヒロインに悩んでいましたねあの時。

結局棚町が次回ヒロインに決まって解決したんですが…。

今も投票は継続中なので、小説の紹介みたいな所をよく読んでご投票お願いします。

と

別の話なんですが

友人がこれをみまして、

「オリキャラでないの？」

とかなんとか言っちゃうわけですよ。

まあ一次創作ですし、オリキャラいいや空氣を醸し出していたのですが、

正直な所ちょっとアリかなーとか思つ今日この頃ですね。

そんでもって致命的のが
アマガミのゲーム版のストーリーを知らない
と言つ事なんですよ。

一応、某ワニマガジンさんで連載中の漫画を資料にして
一生懸命棚町編のストーリーを練り上げているんですよ（わら）

高嶺編よかストーリーが作りやすいのが本音なんですよ。

アマガミやキミキスは比較的他キャラと絡む機会が多いんですがラブプラスは他キャラとまったく絡まないんですよ。
からうじてこう言つストーリーが出来たんですがねえ
もつと修練すべきですね

では次回からは棚町薰編

開始です！！

全力で頑張りますよーー！！

He is something in between・1(前書き)

棚町 薫『たなまち かおる』

クラス：2年A組

部活：なし

血液型：B型

年齢：17歳

誕生日：8月1日

星座：獅子座

好きな事：明るい雰囲気・恋愛の話・悪ノリ・甘い物・炭酸飲料・掃除洗濯・新発売や季節限定など目新しいもの

苦手な事：暗い雰囲気・退屈・ノリの悪い人・カエル・中学時代のあだ名・試験やテストなど試されること・あやふやな物言い・勉強

家族：母

通学手段：徒歩

橋純一とは中学校からの腐れ縁で、ツツコミ役。

サバサバした男勝りな性格で、誰にでも分け隔てなく接するので友人が多い。

絢辯詞とは、クラスの男子達の間で人気を二分している。流行、おしゃべり、イベントが大好きで、何にでも首を突っ込むトラブルメーカー。

そのため中学時代は「輝日東の核弾頭」というあだ名が付けられた。幼少時に父を亡くして以来、母子家庭で育つ。

今時の女子高生見えるが、放課後はバイトに明け暮れており、家計の足しにしているほどしつかりしている。

オシャレで非凡なセンスの持ち主であり、特に絵画に関しては、教師達からも一目置かれている。

「はふう～。」

二学期が始まり一ヶ月が過ぎようとしていた。

僕もボケボケ頭で朝から机に突つ伏している。

妹の美也が朝からみやーみやーつるせこからこうして学校の机でなら安心で寝ていられる
「マツホーー!!」

ドサツと重たい物が背中にのしかかつた。

漢は憂うてナ眼で背中を察つて女の方

棚町薰を見つめた。

あ、たゞ車だひとし物だ

「ほーら、シャキッとしたしなやかーー。」

二十九

一向に氣の向

一向は気の向かない儀を見て
薰は急に頭を抱えた。

「おかしな事が何が何でもないのれ

「よし……それは奇跡の出逢いだつたわ……あの時受

なのに、もうあたしに興味がないと言つのね。」

卷之三

「さんざんあたしを弄んで捨てるのねー。」

「だーかーらー薰う！！」

「よう大将…ありや？今日の夫婦漫才はだいぶシユールじゃんか？」

後ろから幼馴染の梅原正吉が顔を覗かせる。

「そうなのよー、純一があたしには飽きたからって…。」

「な…それは可哀想に…まったく大将も趣味が悪いやい…。」

「わかつてくれるのね梅原…ああ、純一はあたしを愛してくれないのねー。」

「もうやめてくれよー…。」

「いやつて僕と薰はいつものように悪友として時間を過ごしていた。」

「ねえ……いい加減やめてもらえない。」

授業が終わり、ひと段落ついて廊下に出た所にC組からシンティルの女の子が歩いて来た。

「え？ えっと……どういう事ですか？」

「朝から不埒な喋り声が毎日毎日聞こえて来るって苦情も来ているのよ。」

「あの、僕が何か…。」

「あの棚町つて人と毎日変な事してるわよね。」

「薰……げっ！ あの声、聞こえてたんですか？」

「あたりまえよ……で、あなた、名前は？」

「橋純一です。」

「そう、風紀を乱す者は容赦しないからね橋君。」

「……はいすみませんでした、えーっと。」

「栗生めぐむよ…。」

「はい、気をつけます栗生さん。」

「フンッ……」

栗生さんはプリプリ怒りながら帰つて行つてしまつた。

すると、見計らつたかの様に薰が隣に走つて來た。

「ふーっ、あんたが廊下に出たからチャンスだと思つて飛び掛つつと思ってたのよねー。」

「飛び掛ればよかつたじやないか…。」

「言つたわねー、でもあたしが被害受けそうだからバス…！」

「ま、栗生さんに名前を覚えられてたしな。」

「つつきわね、元氣を持て余し過ぎただけよ…。」

「はーはー…。」

僕は笑つて薫の方をチラツと見た時だつた。

薫は僕と反して珍しく真面目な顔でこちらを向いていた。

目が合つた瞬間

僕も薫を少しきつとしたのか、
音がするくらい素早くそっぽを向いた。

しばらく無言で窓を見ていたが
薫はいきなりこう切り出した。

「今ので、あたし達の関係つて変えたくない?」

「へ?」

「だからさあ、毎日バカやつてる友達関係とかで、もっと進展させ
たくないワケ?」

「いや、話の意図が僕には見えて来ないんだけど。」「
んもう鈍臭いわね!..」

薫はバシッと背中を叩いた。

「イッターアアアア!..」

「絶対変えてやるわ!..」

そう言つと薫は教室に入つて行つた。

放課後になつた。

急に読書がしたくなる衝動に駆られた僕は、梅原と別れ、一人図書室に向かつた。

夕暮れの図書室で本棚を眺めながらボーッと突っ立っていた。特に面白い本は無さそつだが、気になるタイトルがあつたので取つてみた。

「あ…。」

不意に後ろから小さな声が聞こえた。

「ん？」

僕が振り向くと一年生だろうかショートの女の子がこちらを見ていた。

「もしかして読みたかった？」

「…別に、アタシは興味ない。」

「そつか、ごめんな。」

「あ…それさ、別の場所の本だからリン、ア…アタシが返すから。」

「そういう事だつたか、わかつたよ。」

僕は近くの一人掛けの椅子に座つて、ゆっくりと最初のページを開いた。

それから、どれくらい経つただろうか、

僕はあのショートの女の子の声で我に返つた。

「もう下校時刻だから、早くして…。」

「あ…ごめんごめん、つい夢中になつて。」

「まったく、そんなおちゃらけた恋愛小説がなんで人気なのか、わ
かんないし。」

「これ嫌いか?」

「あたりまえじゃん!…!リンク、そんな男なんか望まないし。」

「リンク?」

「う、うひせいなー…早く帰れ!…」

「おおおおいちょつとお…。」

僕はリンクと言つ女の子に図書室から追に出されてしまった。

「はあ…そんな男…か」

あの小説の主人公

僕のそれとまったく似ていて面白かったのに、
女の子にとつて僕は望ましくない性格なのかもしれない。
恋愛の失敗を引きずつて
最終的に女の子に気づかされる。
そんな恋愛を僕は心の中で望んでいたのかもしけない。

涼しい風が僕の背中を押す。

輝日東の駅前アーケードを抜ければすぐ自分の家なのに帰る気が起きなかつた。

「あ！」「い」「！」

「へ？」

後ろから美也に声をかけられた。

「にいにこれから帰り？」

「ああ、でもどこか寄り道したい気分なんだよな。」

「うんうんみやーもわかるよその気持ち。」

「美也も寄り道したい気分なのか？」

「うーん、みやーはこれからゲーセンで待ち合わせなのだ……」

「へー、美也がゲーセンなんて珍しいな、で誰となんだ？」

「にしししー、気になる？」

「まあ、気になる。」

「新しい友達！格闘ゲームが得意なんだって！……」

「へー、ついに美也にボーカフレンドが出来たか。」

「ブツブー！実は女の子なのだ！！」

「なんだ女の子だったのか、でも珍しいな、女の子が格ゲーなんて。

「ふつふーん、みやーのお友達と闘つてみる？にいに……」

「な、ふつ丁度いい、僕は今、ネガティブパワー全開なんだ。女の子だろうがなんだろうが、捻り潰してやるっ……」

「じゃ、えーっとプレイブルつてゲームだから先にやつてて、みやーとお友達は後から行くから。」

「おう……」

僕はいきつ立つてゲーセンに走つて行つた。

何度かやつた事のあるゲームだったので、とりあえず主人公の大剣使いを選んでCPUとの対戦を始めた。結構コンボも決まってスカッとする。

「あー！」

「ウォリヤー！…」

「ヘルズファング！…」

声も一端の声優っぽいのもまた心踊る。

順調に進んで四回戦目、筐体の向こうから美也の声が聞こえた。

「にしししー！結構迫力あるね！…」

「うん、そこがリンゴ的にはいいんだけど。」

「へー、凛子ちゃんやっぱりかっこいいね～。」

「なにそれ、リンゴ全然かっこよくないつつーの。」

「かつこいいつて～。」

と雑談に花を咲かせている二人を尻目にCPU相手に必死の闘いを僕は続けていた。

「あ、相手負けちゃいそっだからやろやろ？」

「はいはい。」

やつと二人の話も終わり、向こうはキャラ選択を始めた。

「いつもリンゴはこいつ使ってるけど…。」

と、猫のようなキャラにカーソルを持って行った。

「おー！みやーもそのキャラが気になつてたんだー。」

「そつか、じゃ今日はこいつ使おう。」

スタートボタンを押すとバトルが始まった。

「さ、今日もボコボコしますか…。」

ぼきぼきと指鳴りが聞こえたと思うと

あつと言つ間に倒されてしまった。

「一ノ瀬千鶴さん、お手伝い下さい。」

「せーい！」

「にいには完敗だつたね」。

「ああ、君強いな……。」

「にいにつけあーー！」

「あれ？図書館の……。」

「あれえもう知り合いだつたのにいにと凜子ちゃん。」

「うん…まあそりだけど、リンクもや、あの時ちょっと嫌な気分だ

つたし...ごめん。

「ん？ いや僕は気にしてないから。」

「にしにし、にいにちよつとは嫌な事忘れられた？」

「ああ、美也と君のお陰だよ。」

「君君つていつまで名前聞かないの？」

「え？ あ… ああ僕は橘純一、よろしくな。」

「小早川凜子、よろしく。」

「にししー新しい友達出来たね！…さーてみやーも便乗便乗！！」

こうして小早川と美也とゲーセンで楽しく過ごした。

小ネタを挟みます。

タイトルの意味がわからんて方に意訳をすると
「悪友と書いて愛しい人と読む」
となります。

直訳だと

「彼のいくつかの事は中間にあるのだ。」

となつて、棚町の悪友か恋人かの境を彷徨うといふ意味で捉えてくださいませ。

ちなみに

「彼はいくつかの事の間にあります。」
とすると、橘君は何かに挟まれちゃいますし
シユールな感じを醸し出しちゃうので気をつけくださいませ。

薰と僕がこうして毎日話し合い
バカやつて いる事に別に変化なんていらない。

秋空の朝の通学路に
欠伸をしながら歩く学生達も
なにも変わらないし変わつていない。
ただ季節が刻々と変わるだけだ。

「おひせやーーー！」
「よう薰、珍しきなお前と通学路で会うなんて。」
「でしょー、ちよつとずつあたしも変わっちゃうんのよーーー。」
「そつか、でも今日はヤケに元気じゃないか？」
「そつかな？ま、こつものあたしょつこ思つわよーーー。」
「うぬやくなれば最高なんだけど。」
「ひっビーーー！それあんたがいつ言葉？」

「うん。」

「そ、うなんだー、い、う言葉なんだー。」

「さうだよ」

ま
関係なし!!

薰は胸の前で手でバツを作つてはにかんだ。
でも二つか違う。

いつもの薰の笑顔じやなかつた。

「じゃ、あたし、恵子に呼ばれてるから先に行くわね。」

「うん、じやあな。」

薰は急いで駆けて行つてしまつた。

「あ……薰。」

「へ？」

後ろから薰を追いかけて

田中さんが走つて來た。

「ちよつと田中さん！！」

「え？ あ……橘君。薰どうしたの？」

「あ……どうしたもこうしたも田中さんに呼ばれてるつて走つていつたんだけど。」

「私、薰呼んでないわ……いつもはもっと早く着くんだけど、今日は寝坊しちゃつて。でも橘君と薰が見えたから。」

「じゃ……じゃあ薰は……」

「何かあつたのかな薰。」

もしかしたら

薰の変化は僕との決別なのかもしれない
頭に少し過ぎつた。

僕は教室まで走った。

カンカンと鳴り響く階段を駆け上がる。

「薰！－！」

教室のドアを開けると咲野さんや絢辻さんがこっちを振り向いた。

「あ…」「めん。」

「ああ、橋君、棚町さんはまだ来てないよ。」

「あ、ありがとうございます咲野さん。」

「いえいえどういたしまして。」

「私が来るとときは女子トイレの方に走って行つたのがみえたけど。絢辻さんはカバンから教科書を出し終えて、そう言つた。

「そつなんだ、ありがとうございます。ちょっと探してみ……」

「げつ！－！」

「あ！－！薰！－！」

「う…は、ハ－イ…はは。」

「…。」

僕は薰の挨拶を無視して席に着いた。

「ちょっと純…。」

「薰、どうして嘘ついたんだ？」

「…あ、あたしの勝手でしょ！…どうしてあなたに干渉されなくちゃならないのよっ！－！」

「僕は薰を心配して言つてゐるのにそんな言い草ないだろ！…何か引っかかっていたものが

ブツリと切れた。

「変わりたい変わりたいって、なにがそんなに不満だよ！…僕が嫌なんだろ！…友達にたかる様な僕を見て薫は嫌気がさしたから僕から距離を置きたくて変わりたいんだろ！…」

「橋君…。」

「純…あんた、本気でそう思つの…。」

「当たり前だろ！…薫が嘘ついてまで僕から離れたくて、そうしたんだろう！…それ以外の…。」

パシッと

乾いた音が聞こえて僕の頬が熱くなつた。

「知らない！…あんたなんか知らない！…最低よ！…」

「うるさいな！…そんなのわかってるよ！…」

薫は歯を食いしばって泣くのを堪えていたが、自分の机にバッグを叩きつけるとドアを蹴飛ばして外へ飛び出した。

「おい大将つて…おい！…棚町がつ

「あいつがなんだつてんだよ！…」

僕は自分の椅子を蹴つてから教室を飛び出した。

「ねえ…どうすればいいのよ。」

独りあたしは屋上でつぶやく。

朝の時も、あいつがあたしにあんな事いうから

本当はあたしの事が嫌いなのかなってそう思つちゃった。

「バカねあたし…独りよがりってヤツなのも氣づかないであいつに迷惑かけちゃってたわ…。」

でも本当は違う。

こつしてむしゃくしゃしてくるのはお母さんせいだ。

再婚相手と話してる姿、

あんなに楽しそうなお母さん、あたしは見た事なかつた。

「あたしとじやそんなんに不満なの?」

手すりにもたれかかり

あたしはそのまま消えちゃおつかなとも思つた。

「気まずいわね…今日はサボるかしら。」

いまさら教室に帰つたとこりであいつと皿を合わせるのも

なんだか嫌。

「バッグだけ取つて帰ろ!」

あたしは階段を駆け下り教室に入つた。

「よう棚町!!」

「あ…梅原、あたし気分が悪くて…。」

「大将が棚町のこと一所懸命探してるやつ?」

「もう…あたしに構わないでよ…。」

あたしとじやバッグを取ると逃げよつとした。

「棚町さん待ちなさい！！」

絢辻さんがわたしを呼び止めた。

いつもとは違う、真剣な眼の絢辻さんは
あたしの前に立つた。

「…クラス委員だから一言言わせてもらひます。」

「…なによ。」

「あなたの事を探している人がいるのに逃げるのは卑怯よ。」

「う…うつさいわねもう我慢できないわ。あたし帰る！…！」

「棚町さん…！」

咲野さんが席を立つて追いかけようとするが引き止められた。
あたしはバッグを持って再び飛び出した。

僕が教室に戻ると薫の姿はなく、ひつそりと静まり返っていた。

「梅原……薫は……。」

「ああ……帰つちまつたぜ棚町。」

「チツ……薫のヤツ……！」

「待てよ……！」

梅原が僕の肩を掴んだ。

「今は待とう、追つてもあいつは逃げるだけだぜ。お前もあいつと付き合つてわかるだろ?」

「くつ……わかった、薫が話すまで僕は待つよ。」

「あいつは滅多な事で折れるヤツじゃなこさ。」

「わかつてゐ、わかつてゐぞ……。」

「橘君もよく考えるべきだわ。」

「絢辻さん……。」

「棚町さんの話ぶりからしてあなたは誤解していたんじゃないかしら?」

「僕が?」

「そうよ、棚町さんがあなたを避けるそぶりを見せていたかしら?」

「いや、でも今日の朝、僕に……。」

「棚町さんは最近よくお手洗いで見かけるけど、いつも個室から出ると顔を洗つていたわ。」

「薫が……。」

「それがどういう事が少しあ想像がつくんぢゃないかしら?」

「……。」

「私が言いたいのはそれだけよ。」

「薫……。」

「私が言いたいのはそれだけよ。」

「薫……。」

チャイムが鳴り高橋先生が入って来た。

「あれ？ 棚町さんは？」

「今日はおやすみだと思います。」

梅原が声を上げる。

「そう、じゃあ橋君、棚町さんにプリント持つて行つて上げて頂戴。

「え……あ、はい……。」

僕は先生から受け取ったプリントをカバンに入れた。
薫は今頃どんな気持ちでいるのか

気がきでなかつたのは、たぶん僕に罪悪感があつたからだと思ひ。

放課後になつた

「あ！－にいにだ！－！」

「美也か、あれ？これからか？」

「うん！－今日も凜子ちゃんと帰るんだよ！－！」

「そつか、仲良しでいいな。」

「まあね～、あ！－凜子ちゃん凜子ちゃん！－かえる－－－！」

「うん、あ、橘先輩じゃん。」

「やあ、じゃあ僕は用があるからや。」

「ちょっと待つてよにいに！－せつかくだし、今日も一緒に帰るつよー」

「いや、薰のウチにプリント届けなきゃなんだよ。」

「へ？ 棚町先輩？」

「ああ…あいつ学校サボつてさ。」

「ねえ…棚町つて薰先輩の事？」

小早川が僕に近寄つた。

「ああそうだよ。」

「…薰先輩が」

「凜子ちゃん、棚町先輩と知り合ひなの？」

「知り合いつていうか、昔は独りぼっちのリンゴの事面倒みてくれてたけど…。」

「そうなのか、確かに中学の時に薰がよく後輩の話をしてたけど小早川のことだったのか。」

「そう、母子家庭で凜子もパパと一人つきりだからお互いに愚痴り合つたことあつたし。」

「ですか、小早川も苦労してるんだな。」

「…別にそんな大それたことじゃないし、最近パパも再婚したしそ

「んなに苦労じやない。」

「そつか。まあ着いて来たいなら着いてくれればいいよ。」

「じゃあ決定……にして……！」

美也が靴を脱いで玄関を飛び出した。

宣伝タイムです！！

最近…と言いますか、オリジナルの恋愛小説
コイガタリを書き始めました。

たぶんオリキャラとやらはコイガタリからひいて登場させる予定
です。

またキャラ投票も随時行っているので詳細はアマキス・プラス+ト
ップからお願ひします！！

美也と小早川は一人で盛り上がりがっていたが
僕は乗り気ではなかつた。

「にいにもそう思つでしょ？」

「え、あ…」めん、良く聞いてなかつたよ。」

「もう話聞く…！」リンゴがもう一回説明するからさ…！」

「みやーはまんま肉まんは」飯に乗せても美味しい」と思つのに…！」

「だから炭水化物で炭水化物食べてどうするつづーの…！」ポテチならいいけど。」

「凛子ちゃんはまんま肉まんの美味しさを知らないのだ…！…だつて

お好み焼きとか焼きそばとかでご飯食べる人もいるじゃん…！」

「だからつて肉まんをオカズにはしないつづーの…！」

「むう…。」

「やつてみたらいいじゃん…。」

「じゃあみやーまんま肉まん買つてこよ一つと…！」

「お、おい美也…。」

美也は「ンビニに入つて行つてしまつた。

急に一人つきりになつてなんだか氣まずいなと思つていたら、
小早川の方はそれでもなかつたようだ。

「あんたさ、薰先輩とどういう関係？」

「は？あ、いや…友達、かな。」

「ふーん、てつきり恋人かと思つて損した。」

「恋人？僕と薰がか？」

「いいじやん虜げられる彼氏。リンゴそういうの好きだよ。」

「前は嫌いだつて言つたくせにな。」

「弱つちい男と虜げられる男とは違うの。わかれ…！」

「あ……そう、だよな。」「

「今のおんたは弱つちい男。頑張つて虚げられる男にまでなれ！！」

「口が悪いな小早川は……。」「

「今更？」

「ああ、今更な。」

小早川はクスッと笑つた。

「薫先輩はそんなあんたの事、結構気にしてんのに、鈍感じや意味ないじやん。」

「薫が僕をか？」

「他に誰がいるん？」

「梅原とか。」

「梅原先輩は範疇じやないんだつてさ。前にリンゴ聞いたもん。」

「そつか……。」

「だからもつと元気出せつづーのーー！」

小早川はバシツと背中を叩いた。

まるでそれは薫がしたような感じがした。

「え？ 薫、帰つて来てないんですか？」

「ええ、早退したなんて知らなかつたし：どうしたのかしら薰：。」

「一応、プリントだけ置いておきます。僕、薰探してきますんで。」

「ごめんなさいね。」

小早川と美也は黙つてしまつた。

「僕は薰を探すから美也は先に帰つてろ。」

「えー！…今日、パパもママも帰つて来ない日じゃん！！！」

「飯炊いてまんま肉まん乗つけて食べればいいじゃないか…。」

「リン」「んぢ來ればいいじやん、独りが嫌ならセ。」

「いいのーー！にしぷし～じやあ遠慮なく…！」

「小早川、美也頼むな。僕行つてくるから。」

「りょうかい！…ついでにカバンも持つてくからさ、走りづらいだ
ろうじ。」

「ああ、サンキュー。」

僕は学ランとネクタイを脱いでカバンの中に入れると、
全力で走つた。

「薰といつも一緒に行つてたのはゲーセンだし…。」

商店街のアーケードを抜けて、駅前のゲーセンに入った。

相変わらずタバコ臭さが鼻を突く場所だ。

「薰：いないな…。」

グルッと一回りしたが薰の姿は無かつた。

「バイト先にいるのかな。」

僕はゲーセンを出て薰が良くバイトしているファミレスに向かつた。

店のドアを開けると

店員さんがこっちに向かつて走つて來た。

「いらっしゃいませ、お客様は何名様ですか？」

「あ…えつと、十羽野高校の棚町さん、今日はいらっしゃいますか？」

「いえ、今日はシフトは入つていません。」

「そうですか…あつとお持ち帰りでいいんで何か買って行きます。」

「あ、はい！お持ち帰りでしたらポテトなどいかがでしょうか？」

？

結局、トトスに薫はいなかつた。

他のバイト先もわからず、

僕は独り丘の上公園に足を伸ばしていた。

すっかり暗くなつた公園には
人の気配が全く無かつた。

コツコツとローファーが敷石に当たる音が聞こえた。

「薫？」

「残念、私だよ橘君。」

「あ…田中さん。」

「うん、私も薫が早退したからどうしたのかなつて思つて薫の家に寄つたんだけど。」

「そつか…。」

「薫が私にも言つてくれない悩みなんて全然無かつたから、心配で。

「結構重たい問題なんぢやないかな？」

「そうね…。」

僕も田中さんも

それから無言になってしまった。

しばらくして田中さんはじめないと、

公園を後こうした。

結局、薫は一晩探し回つても見つかなかつた。

「何處いったんだ薫っ！－！」

僕は寝るのも忘れてあちこち駆けずり回つた。

薫のウチに連絡しても依然帰つて来ていないらしくお母さんも気が気ではなかつたが、僕にも家に帰つて休んでとそう言つてくれた。

朝日が昇つて來た。

学校も今日は休もうと思つた。

「薫が家出したのは僕のせいだ！－！」

寝ぼけ眼の顔にそう言い聞かせ僕はひたすら走つた。

昼には梅原に電話を入れた。

「梅原、薫は学校に來てるか？」

「よう大将、それがさっぱりだ。通学路でも見かけた奴はいねえつてさ。」

「そつか…」

「それよか純一君よう。」

「なんだよ？」

「棚町みつけた時はチューして…」

「じゃあな切るぞ。」

「うわああつとと、待てよ…」

「なんだよ？」

「頑張れよ橘純一！－！」

「ああ。」

僕はもう一度ゲーセンから洗つ」と云つた。

搜索は夕方まで続いた。

それは疲れきつて立ち寄った十羽野市のファミレスだった。

僕はカウンター席に座り、メニューを見ていた。

「こんな季節だけど喉からからだからアイスコーヒー飲もう。」ボタンを押して店員さんが来るまで待っていた。

「ご注文は…あつ。」

「え？」

目の前には薫がいた。

僕は終始啞然としていたが

薫は僕の顔を見ると肩を震わせていました。

「薫…まず一番先に僕が謝らなくちゃ…。」

「そつ…それは後にして…十五分後に終わるから。」^{（注文は…。）}

「アイスコーヒー。」

「…はい。」

薫が走つてキッチンへ入つて行つた。
それから薫の姿が見当たらなかつたが
運ばれてきたアイスコーヒーは
いつものコーヒーより苦かつた。

十五分後

僕はスタッフ入り口で待つていた。

「純一…ゴメンね待たせちゃつた。」

「いいよ…あの…「ゴメンな。」

「

「純一……」

「薰が苦しそうにしてるのに、僕は何もしてあげられなかつた。」

「……」

「どんなぐらゐ辛いかなんてわからないけど、でも薰が苦しんでる事に変わりなかつた。」

「……」

「僕には薰の苦しさはわからない……けど、どうにかして薰の力になる事なら出来る……ずっと薰の笑顔を見たいから、ずっと薰とこうしてたいから、だから……」

「……てんきゅ……純一。」

「え？」

「んつ……。」

薰の田尻から涙が零れた時

僕の唇に暖かい感触が伝わつた。

「んん……。」

「う……ちゅ……。」

「かお……る。」

「ふはあ……ふふつ……！契約完了了……！」

「けつ、契約つてなんの契約だよバカ薰……！」

「ずーつと私の側にいる契約よ！……！」

「なんだよそれ……！」

「さつきあんたから言つた癖に……！」

「え？ 僕……。」

「ずっと薰といつしてたいつてさ。」

「……」

「純一……あのね、来て欲しい場所があるの。」

「え？」

電車に乗り込み臨海駅に着いた。

強い潮風が改札を駆け抜ける。

「もう少し行つた所よ…。」

海に沿う歩道には、季節外れの影響か人の姿はちらほらだった。ただ、革靴が立てるリズムと波の音が僕達を包んでいた。

「あそこ」、港の丘公園よ。」

「…凄いな、綺麗な場所だよ。」

「いつもの公園とは違う雰囲気でしょ。」

「ああ、町じやなくて海が見えるな…。」

「…純一。」

「ん？」

「あたしね、あんたと喧嘩する前の日にバイト先で知らない男の人と一緒にいるお母さんを見たの。」

「え？…それって…。」

「もうお父さんはいないけど、でもなんだか許せなくて…。」

「そんな事があつたのか…。」

「うん、でね、なんで二人で頑張りうつて決めたのにお母さんは逃げたのかなつて普ツン切れちゃつてね。」

「お母さんとも喧嘩したのか？」

「ううん、そうじやなくて、甘えたくなつちやつてでもお母さんには甘えられないから…あんたに…。」

「そつか。」

「…。」

「小早川つて覚えてるよな。」

「え？なんであんたが凜ちゃんの事…！」

「同じ高校の後輩なのに、それはないだろ？」

「え？ 今凛ちやん、あたしと回じ高校なの？」

「美也と仲良しだぞ。」

「そりなんだ…。」

薫は海を見つめながらじぎじぎ黙っていた。

「ねえ純一。」

「ん？」

「あたしを見つけてくれたの、あんたで良かつた。」

「そうか…僕も薫が無事で良かった。」

「ふふ、か弱い女の子が良かつた？」

「それは僕じや手に負えないから、薫が強くて良かつた。」

「じゃあひめむせこくて良かつた？」

「ああ、ひめむせくないと調子出なこよ。」

「てーんきゅつ…！」

「ああ…！」

僕達は帰路についた。

「朝から妹と登校なんてシスコン?」

「な訳無いだろ!」

美也と待ち合わせをしていた小早川に釘を刺された。

「お兄ちゃんはいつもみやーを置いてくから、たまには一緒に登校するのだ!! にしししー!!」

「だそ、うだ、ほら、僕は潔白だろ?」

「にいにとかお兄ちゃんとか、そうやって妹にいろいろ言わせてるのを見ると、リン口納得しないなあ……。」

「ぐつ……。」

「お兄ちゃんが学校ではおに……。」

「うわあああ、みみみ美也!…」

「怪しい……。」

「ふぐう……僕だつて!! 僕だつて……好きな人くらい……。」

「お? 誰だ? ……リン口に言つてみなよつ!!」

正直、僕に好きな人はいない。

しいて言うなら森島先輩だが、それはただの憧れだ。
果たして僕の好きな人ってだれだ?

「ヤツホー純ー!! あれ? 凜ちゃん!!」

「薰先輩じゃん!! 薫せんぱーーーい!!」

「まったく、今でも甘つたれなんだから!!」

「嬉しいからいいじやん!! でも先輩、どうして家出なんかしたの?」

「ん? うーん… 純一には話したんだけど…。」

薰は小早川に今までの経緯を淡々と話した。

小早川はその間、真剣に話を聞いていたが

険しい表情ばかりを浮かべていた。

「 薫先輩、甘いですよ…。」

「え?」

小早川の口から出た言葉は意外なものだつた。

「親だつてちやんとした再婚相手を探して、子供に苦労かけさせたく無いつて思うの当たり前です…。」

「 凜ちゃん…。」

「リン口も悩んだ、いつぱーいつぱい悩んでパパが新しいママと一緒にいるのを見たら怖くなつた。」

「 …。」

「でもリン口は耐えた!! パパが選んだママだからひとつ思つて…!…」

「 凜子ちゃん…。」

「リン口は新しい家族が出来て嬉しかつたよ…。リン口に弟が出来たんだもん…。辛い事だけが世界じゃないつて教えてくれた。だから薰先輩も頑張つてよ!! リン口の大好きな薰先輩はそんな事で逃げないもん!!」

「 てんきゅ…凛ちゃんに言われるなんてあたしもまだまだね。」

「 薰先輩…。」めんなさい…。リン口、先輩に酷い事…。」

「 いいの、よくわかつたから。凛ちゃん… てんきゅね、本當!!。」

「うん…。」

小早川の泣く姿は

なんだかとても輝いていた。

そろそろ次回作のヒロインを決めたいので
リクエストがある方はドシドシ感想欄に書きなぐってくださいまし
!!

前回投票結果も薰以外で反映致しますのでご安心を
今のところ次回ヒロインは七咲になりますが、皆様のリクエスト
お待ちしてます!!

相変わらず僕と薫の関係は悪友

秋が過ぎ去り、すっかり冬の冷さに包まれた11月の半ばに
とある事件は起きた。

「橋君、ちょっとといいかな？」

「え？」

薫との朝の恒例、夫婦漫才の最中、田中さんが声をかけてきた。
「あー！ いけない、恵子ごめんね。あたし純一に言うの忘れてた
わー！」

「な……なんだよなんだよ？」

「じゃ、じゃあ放課後に校舎裏に来て？」

「あ、うん…。」

なんだか今日の田中さん、雰囲気が少し違った感じがした。

半ば強引な誘いに乗つて

僕は放課後に校舎裏へ向かつた。

「あ、来てくれてありがとう橋君。」

「ああ、で僕に用事つて？」

「うん…あのラブレター…なんだけど。」

「え？」

田中さんは少し恥じらいながら

僕に一通のラブレターを手渡した。

梅原や薫のイタズラじゃない

正真正銘のラブレターだ！！

「…これ。」

「うん、中…見て?」

「あ、ああうん…。」

白い封筒を開けると

中からピンクの手紙がチラリと顔をだした。
これは予想だにしていない結末なのかと
終始高鳴る胸を抑えながら手紙を開く。
パリパリっと紙が擦れる音がして
綺麗な字が見えた。

「えつと…。」

上から順に読み進める。

並ぶ好きですという文字

女の子の切実な想いの文を田にし

最後の文字に田を向けると

「へ? 神谷正樹?」

「ひつかかたわねー純ーー!」

「薰っ!ーお前田中さんと組んでまた俺を引っ掛けたのかつー?」

「違うわよ。あはは、ねえ恵子?」

「うん…これ、男の子がみたらどう思ひつかなって思つて。」

「あ、そなういうと初めに言えば良いのにーー!」

「それじゃあ本当の気持ちがわからないでしょ?で、どうだつたわけ?」

「ど…どうだつたつて…。」

「あんたが恵子のラブレター読んだ感想よーー?ね?ドキドキした?」

「うん…まあ、ドキドキした。」

「あやーーー恵子、よかつたわねーー!」

「うんーー!」それで神谷君に渡せる。あつがとう、薰ーー橘君ーー!」

「はいはこどーいたしましてーー!」

「うつして僕の一瞬のロマンスは幕を閉じた。」

その日も平凡な朝になるはずだった。

「おはよ……」

「あんた達が何したかわかつてんのつー…?」

「てめえには関係ねえだろ棚町!!」

「関係あろうとなからうと、あたしは絶対に許さないーー!」

「やめて薰つーー!」

散らかつた机とその間で睨み合つ薰と神谷
鬼の様な形相の薰に縋り付く田中さんも見える。

周りの人達はヒソヒソと話をしていたが、

絢辻さんが間に入った。

「事情はわかつたわ、だけど神谷君、一番悪いのは貴方よ。棚町さんと田中さんに謝るべきだわ。」

「つむせーんだよ偉そうな口効きやがつて!!」

逆上した神谷の拳が絢辻さんに降りかかる寸前で僕はその手を抑えた。

「いくらなんでも女の子に手を出すなんてレベル低いんじゃないかな
つーー!」

「櫛…てめえは女子の味方して好かれたいからこんな事するんだろ
…。」

その一言で

僕の何かが切れた。

僕の右手が神谷の頬を殴った。

不意を突かれたのか、神谷はよろけて机に激突した。

「やつたなでめえーーー！」

「やめなさいーーー！」

「やめなさいーーー！」

ドアが開いて栗生さんが神谷を取り押さえた。

「高橋先生、神谷君を。」

「ええ、立ちなさい神谷君。あと、棚町さんと橘君は一時間の休み時間に生徒指導室に来なさい。いいわね？」

「…。」

僕は呆然と立ち尽くしながらコクリと頭を振った。

一時間目の授業はまるで頭に入らなかつた。僕と薰はチャイムがなると同時に席を立ち早歩きで教室を出た。

「待つて二人とも…。」

田中さんが後ろから走つてきても、薰は振り向こうとしなかつた。

「薰…私…。」

「あんたは黙つてなさい…。」

「…か、薰！－ゴメン薰、私…！」

「黙つてなさいって言つたでしょ！－あんたが口だしてもこれはあたしらの事なのよ！－関係ないでしょ！－！」

「関係くないわよ棚町さん…。」

「…え？」

呆然と立ち尽くす田中さんの後ろから絢辻さんが歩いてきた。

「全部一人で抱えようとしてないで、橘君もよ…。」

「…あたしは、別に…。」

「そう思つてるのは私だけじゃないわよ。」

すると、

ぞろぞろとクラスメイトが廊下へ出てきた。

「ほりね？」

「大将も棚町も水臭いぜ！－いつも一緒にだろ？』

梅原が僕の肩を引き寄せた。

「ちつたあ男らしい事ができる様になつたな純ー。』

「梅原…」

「心配すんなって、俺達が麻耶ちゃん説得するからよつ……。」

「あ…ありがとうな。」

「いいくてことよーんじゅ行ひつけ…。」

梅原が生徒指導室に向かつて走り出すと

僕も釣られて走った。

川田先生に注意されても僕達は走った。

「……つと、ここまで来たはいいが、ここで止めるかと気が引けるな。」

「ああ…。」

「じゃあ開けるわよ。」

絹辻さんがドアノブに手をかけて回した。

「来たわね橘く…え…?どうしたのみんな…!」

「クラス委員として率直にいいますと、今回の件についての橘君と棚町さんは潔白だと思います。」

「絹辻さん…あなた。」

「はいはーい、俺もっすよ…!..」

「私もです…!..」

「僕も一人とも悪くないと思いますが…!..」

「ちょ…ちょっとみんな…。」

クラスメイト全員が僕と薰の味方になっていた。

結局この話は事なきを得たが

田中さんの心の溝はあまり塞がっていなかつた。

軽く眠気覚ました屋上へ上がった時だつた。

「…ぐわつ」

風に混じつて誰かの泣き声が聞こえた。
フェンスにもたれかかつた田中さんは
僕を見てギョッとしたように身を縮めた。

「田中さん?」

「あ…た、橘君…。」

「大丈夫?」

「私に構わないで…!」

「田中さん…!」

田中さんは走り去つていった。

僕は田中さんを追いかけなかつた。

彼女に今、何を言つべきかがわからなかつた。

「…い子のバカ…!」

「…。」

階段の方で声がした。

「あんたね…!!どうしてそんな事しようとしたの…!!」

「薫に関係ないじゃない…!!私はもうこの世界が嫌…」

「…パシッ!!

と乾いた音が聞こえた。

「だからって死んでどうなるのよ…!!あたしはあんたが死ぬなんて許さないから…!!」

僕は寒さも忘れて立ち去くした。

「お…、何をやつてるんだ。イジメか…?」

「誰よ…!!」

「何やつて聞いてるんだ、この子が可哀想じゃないかっ！」

「だから誰よ！…なんの真似よ！…」

「俺は2Dの草壁総一だ。で、好い加減にしないか…。」

「つるさいわね！…死にたいとか変な口呴くのが悪いんじやない！」

「！」

「それをちゃんと聞いたか！…それからやつたのか…！」

「違うわよ！…！」

「じゃあ一方的に叩いたならそれは君が悪いぞ…！」

「あーーーもうサイツテー！…バカみたいね。」

カンカンと足音が聞こえた。

薰の雰囲気は明らかに変だつた。
田中さんは見当たらないうえに
もう授業は終わつてゐる。

突然、ガタツと椅子から立ち上がると
薰は僕の前に立つた。

「ねえ、今日の夕方暇？」
「え？…あ、ああ。」
「ん！…ならよかつた！！ちょいと買い物に行きたかったのよ。」
「はいはい…。」
「ちょっとーーー反応薄く無い？」
「いやーいつもの事だしね。」
「そ…それもそうね、じゃあまた放課後ね…！」
「ああ。」

薰の目は笑つていなかつた。

次の時間は田中さんも席についていたが

薰は一言も口をきかないでいた。

冬間近の11月の末はあまりにも寒かつたけど
教室の中はストーブが効き始めていたので
逆に小春日和の様な暖かさに居眠りをする生徒が続出した。

「はー…じゃあ今日はここまで。」

チンピラばりの末永先生の授業は居眠り生徒はいなかつたものの

大あくびをかましていた。

「純一、さー！行くわよーー！」

「あ…ああ。」

薰に手を引かれ

僕は町に繰り出した。

「どう? 可愛い?」

「うん…それにしない?」

「でもちょーっと違づわね…。」

「…。」

予想はしていたけど、

やつぱり買い物には時間がかかった。

「聞いてんのっ!…」

「あ…悪い…。」

「だらしないじやなーこもつ…。」

「なあそろそろ…。」

「次あるお店よ…。」

「…薰。」

「な…何よ。」

「嫌なことあつたんだろ?」

「ち、違うわよ…ほら、ここに…。」

「もう良い時間だと違うぞ。」

「…。」

「薰…。」

薰は服を戻すと一田散に走り出した。

「待てよ…待てつて…!…」

薰が走った道には黒い点が田印のよくなつていた。
革靴の音が河原に響いた。
もう言葉が出ない。

息が切れそうになつた時だ。

「あ……。」

薫はつまづいてよろけた。

寸前で薫を庇うと

一人して土手の芝生を転がり落ちる。

「はあ……はあ……はあ……」

上に乗つた薫の目からは涙が溢れて止まらない。
僕を見る事に一生懸命なのに
薫は僕を見る事が出来ない。

「純一……うつ……。」

「薫、辛いなら辛いって言えよ……。」

「じゅ……いち……あたし恵子と……。」

「泣くなよ薫、な?泣くなつて……。」

「む、無理よつ……！」

そう言うと薫は僕を抱きしめて泣いた。
小さな肩が震えていた。

僕はその肩をしっかりと抱きしめて上げる事だけが、

今、僕が薫に出来る一番大切な事だった。

ひたすら泣いた薫は
照れ臭そうにはにかんで
少し目を擦つた。

「弱いとこ見せちゃったわね…。」

「いいや、それが知れて逆に良かつた。」

「弱点見つけて満足かしら?」

「いや、やっぱり友達なんだなって。」

「なによ?」

「ほら、薫が家出した時の事覚えてるか?」

「そりゃ~覚えてるわ。」

「その時な、田中さんと丘の上公園で会つたんだ。」

「え? …じゃあ。」

「ああ、平気な顔してたけど、脚はヨロヨロだつた。」

「…。」

「丘の上公園に行こ。まだ時間大丈夫だろ?」

「…うん。」

薫がコクリと首を振つた。

「よし! …今度は僕が先に行くぞ! …。」

渋る薫を置き去りにして僕は走り出した。
薫も小さく微笑みながら僕を追いかける。

「待ちなさいよ! …」「うーーー。」

「待つかよ! …」

白い息が坂に続き、

丘の上公園に着いた。

ベンチに人影が見えた。

「橋君……」

「やつぱり、田中さんならいいいると思つた。」「え？」

薫が息を切らして入り口に入つてくる。

「薫……」

「……恵子。」

「……。」

「ずっと恵子に謝りつつと思つてた……でも勇気がなかつたの……」

「……薫。」

「恵子、あたしを殴りなさい……」「え？」

「殴らないとあたしは恵子を抱きしめられない……。」「薫……出来ないよ……」

「いいの恵子……」

「うん……。」「うん……。」

田中さんはすっと息を吸つて

薫の頬に平手打ちをした。

「薫……」

「いいビンタじゃない……。」「うん……。」

そう言つと

薫は田中さんと抱き合いで互いに涙を流した。

「よう大将！－！知つてゐるかこの話！－！」

「ふえ？」

不意を突かれて僕は変な声を上げてしまつ。

「ぶつ…ふ…ふえ？つて」

「うるさいな！－！－いきなり話しかけるなよ！－！」

「あははは悪かった悪かった！－でよう、その話なんだがな？」

クリスマスが近づいて

すっかり冬の装いを見せ始めた頃

「あんだつてえええ！－？」

「声！－！声大きいぞ大将…。」

「ああ…すまない…つい取り乱して…。」

「何をどう取り乱してんだかつ！－！」

「え？」「げつ！－！棚町…。」

「いつてみなさーい？さあ…さあ…－！」

「い！－！言える訳無いだろ！－！」

「そーだそーだ！－！男同士で恋バナしたなんて言える訳…」

「言える訳？」

「無い…だろ…。」

「うつそーーーーーーー！」

薰はほつぺに手を当てる。

「あ…ああ…あんた達がここここ恋バナ！－？」

「文句あるかよつ！－！」

「へ…へへ…いやあたしにや関係無いけどね。」

「ならどうかいつてな！－！」

「でさでさ、どんな話なのよつ

「…クリスマスデー^トだけど。」

「え?」

薰の顔が曇つた。

「うんクリスマスデー^ト。」

「そ…そう、相手、いるの?」

薰はこちらを見て少しニヤつく

「俺はいな^いが…大将は?」

僕はチラリと薰を見た。

願わくば、僕は薰と過ごしたいと思つて^{いる}。

「誘おうと思う人はいるけど?」

当たり障りのないよう^に言つた。

薰はそれを聞くと

少し顔が険しくなつた。

「薰、大丈夫か?」

「だ…大丈夫よつ!…そういう話ね、んじやーー!」

「お…おい薰…。」

薰は廊下に飛び出でてしまった。

「シャキッとした 棚町薰！」

またボケ一つとしてしまった。

更衣室の鏡の前でほっぺたをペシッと叩いて氣合いをいれる。

デキシーズはウチの生徒をトトスと一緒に分する
結構人気のファミレス。

あたしはトトスと掛け持ちでこここのバイトを始めたのは
もともと純一のある所に誘う為だった。

「薰ちゃん？ 大丈夫？」

「あ…姉ヶ崎先輩… 今日はシフトじゃ。」

「ううん、店長に呼ばれちゃって。」

「そう…ですか。」

「うん…あ…もうつ 元気ないぞおー！…」

「えあ…ゴメンなさい。」

「うーん… もちよつと。」

「はっはい！…」

「うん、じゃあ私は先に行くからーーー！」

そう言つと姉ヶ崎先輩は厨房に走つて行つた。

「元気ないぞおー…ね。」

あたしも姉ヶ崎先輩を追つて厨房に繰り出した。

やつぱり薰の様子はおかしかった。

「くそ…全然面白くないじゃないか…。」

ビーバー三國志を放り投げた。

バレてしまつたのだろうか

一 ハレたら最悪だな

卷之三

「——？」

「あ、ん… ど、こ、だ？ 美也」

「おや、どうせござる」

「ああ、で、なんだ？」

「え? 一歩、そのまへ

「アーティストの本」

「ぐつ
ああ
。」

「んまあそれ

六三

100

「にいにがまだ受験生になつてないウチに行きたいんだつて。」

「僕が……。」

「どうしたのここに？嬉しくない？」

「い……いや、でもそ……うよつと尋ねさせてくれないか?」

「え?...そつか、こいにー!」

「ん？」

「みやー応援してねから頑張るのだー！」
「…」

「アーティスト」

美也は少し寂しそうに笑いながら
僕の部屋を出て行った。

「妹に応援されちゃったよ…はは、」

「ありがとう…美也。」

美也が廊下で泣く声が聞こえたが
今、あいつにかけてあげる言葉が見つからなかつた。

「美也、昨日は『ゴメンな?』

朝御飯に食ひし付く美也は

筆を離れたままじかにに向いた

「ま、家矣依丁の。」

「あー！ いいつていいつて！！ みやーは何も気にしてないのだ！！」

「本当にか？」

うん！！昨日紗江ちゃんちでみんなでクリスマスバー元イーしょ

「紗江ちゃん？」

「うん！！紗江ちゃん！！同じクラスの転校生だよーーー！」

へエリ人脈深しんたな美也。

「おお、氣をつけて歩けってや。」

「うん！－あ！－！今日は菜々ちゃんと一緒に

— ! !

おや、さて僕も朝御飯食へて行こう。

パンにかじりつき玄関を飛び出した。

「クリスマスまであと二日、薰に話をしなくちゃな……。」

通学路に入ると、人が増えて来た。

「おお、元気だね！」元気してるとか、

「ついに三田後はクリスマスだなあええ?どつよ、その子に話した

のかよ？」

「いや…まだなんだけど、」

「あ…橋君だ。」

「おっすーー！」

「おはよう田中さん。」

「うん、昨日ね、薫にクリスマスのお誘いをしたんだけど。」

「薫に…。」

なんだか嫌な予感がした。

「薫、クリスマスもバイトなんだって。」

「ひょえーーー！棚町も良くやるぜーーーなあ大将ーーー！」

「あ…うん。」

「なんだあ反応薄いなあ。」

「あ…いや、ゴメン。」

「別に誤なんくつても言こけどよ、なんか思う所があるつて顔して
るぜ？」

「…。」

「いつて来い大将、俺も薄々気づいてたさ。」

「え？」

「お前が棚町をクリスマス、ティーートに誘う氣でいたのはさ。」

「え…じゃあ薫は勘違いしてバイトをワザと…。」

「そりだらうな、田中さんも誘つ相手を間違つちやいけないぜ？」

「わ…私？」

「おうよ、俺に構うな、あと三日、精一杯やれよな大将ーーー！」

「うん…。」

予想外の事態だった。

「薰…。」

放課後の帰り際の薰に声をかけた。

「あのや薰…。今度の。」

「あ、『ermen』、これからバイトだから…また明日ねーーー！」

「え…薰…。」

薰はそれを逃げるよつに走り去つた。

僕は呆然と立ち竦み
しづらゝの場を動けずについた。

「どうして…。」

あたしは今日も鏡の向こうで泣いていた。

本当は泣いていないのに

どうしてか鏡の向こう側のあたしは泣いている。

「ねぇ、鏡は本当の自分しかうつせないんでしょ?」

涙が伝う頬を

右手でなぞつた。

「ほら…濡れてなんか…ない…じゃない。」

手のひらを見ても、

見えない、

「見えないじゃない!!…見えない、見えな…つひつ。」

純一・純一

橘純一

悪友と恋人の境。

「昔言つてたわよね…」

それはあたしがあなたと出会つた中学の先生の授業。

「覚えてる? 友達と書いて恋人と読むつてことわざ…。」
彼は私の中ではどっち付かずつて意味。

「He is something in between...あれが今のあんたよ。」

お風呂のシャワーの蛇口を捻つた。

「バイトな訳ないじゃない…バカ。」

それから僕達は何も喋らぬままにクリスマス当日を迎えた。

家で寝転ぶ僕のところに
美也が駆け込んで来た。

「ここに……凜子ちゃんなんだよ。」

「小早川？」

「うん……！」

「ああ、ちゅうと待つてな。」

僕は玄関に向かった。

「よつす……へへつ、やつぱりアンタは独りだつたか。」

「小早川……会つて早々に言つてこい事と悪いことがあるつゝの
教えてやるつつか？」

「うわつ……冗談効かないつて……。」

「今日のここにはしようがないのだ……で、どうしたの？」

「あつとせ、薫先輩なんだけど。」

「薫……。」

「うん……本当に先輩、さつ毛丘の上公園で見つけてさ、ずっと誰か
待つてた見たい。」

「……そつか……。」

「……そつか……じゃなこつづーの……絶対アンタの事待つてたんだと
リンク思つんだけど。」

「僕？」

「他に誰がいるんだーつてコン「前に言つたじゅんーーむづじれつ
たいなあ……」

「何がだよ……」

「絶対純一は丘の上公園に来るからあたしは待つって何度も聞かなかつたし！！」

「…薰。」

「ほらせつせと行へつ！－！」

「…そうだな。」

もし小早川の言つてゐる事が本当なら
今すぐこでま…

「行つて来るぞ美也！－！」

「ふえ…い、いつて、らつしゃい…。」

僕は薰をいつも乗せて居た自転車に跨り
全速力で丘の上公園に向かつた。

「薰！－！」

ベンチに座る薰が見えた。

「じゅ……純一」

「あのや……薰、今暇か？」

「バカね……暇、暇に決まってるじゃない！！！」

「ならむ……今日、僕とデートしてくれないか？」

「え……？」

「今日はほり……クリスマスだろ？」

「……うん」

薰は俯きながら僕の自転車まで歩いて来た。

「中学の時覚えてるか？」

「うん……あたしがこの後ろに乗つて。」

「そうだな。」

「ほ、ほらせつかくだから……。」

「ああ。」

僕が自転車に乗りると、薰は荷台に座つて僕の腰に手を回した。

「そんな乗り方だったつけか？」

「うつさいわね……寒いの……！」

「そつか……。」

つとペダルを回すと、車輪が音を立てた。

冬の夕暮れに染まる街は
あまりも鮮やかだった。

僕達は十羽野市と輝日市をグルリと回って
クリスマスで賑わう街並みを見て行つた。

「今日はすげく楽しかったな。」

「そうね…。」

日は沈み

イルミネーションが輝きを増す街を

僕達は疾走した。

今日

薫と行きたい

最後の場所を目指して。

「うーー。」

「ああ、輝田東中学だよ。」

「ちょっと、誰もいないじゃない！！」

「当たり前だろ？もう11時も結構な時間だし。」

「ははーん、もしやあんた、こんなくらーい学校に連れ込んでエッチな事をする気でしょ？」

「ば…バカ…！…入るぞっ！」

「はーはー。」

「思つてたより暗いな…。」

「そうね…でも星が綺麗…。」

「なあ薰…。」

「ん？」

「薰と過ごした日々、僕はずつといのまま食かつた。」

「うん…。」

「いつも笑顔でいて、それだけで良かつた。」

「うん。」

「だけどさ、薰が家出したり友達と喧嘩したりいろいろあって、やっぱり薰ともっと一緒に居なくなつた。」

「純一…。あたし…」

「薰、僕は薰が好きだ。悪友じゃなくて僕と恋人になつて欲しい。」

「あたし…、嬉しい…ふふ、涙がとまらないじやないつー…もつー…！」

「薰。」

泣きじやぐの薰に僕はやつと顔を重ねた。

薰の暖かさが

いつまでも僕の体に伝わつて來た。

「ふふ、純一…てんきゅねー…。」

いやー

棚町薰編も無事に終了です！！

原作未プレイで結構なオリジナル加減を醸し出しましたがいかがでしたでしょうか？

次回は七咲逢編が始まります！！

つとその前に

幕間SHOW、少しお付き合いくださいますーー！

では

グッバイーー！

「あ、どうも七咲達です…。」

「あらもしかして今度のヒロインって?」

「ヒロイン?…なんの話ですか?」

「なんのって作者と読者に聞いた方が早いわよ?」

「じゃあ単刀直入に作者さん、ここってなんなんですか?」

え?なんなんですかって…えっと、

七咲さんのね、男の子とお付き合いにするまでの過程を
勝手におれが書かせてもらつてるんですけどね。

「あ、そういう話でしたか。」

「いや、そんな軽い話じゃなくてね…。」

「では棚町先輩、お疲れ様でした。」

「へ?」

「次回七咲達編お楽しみにーーー!」

ポニー・テールは運動上手？

「えつとその、なんで私達競争しなくちゃいけないのかしら？」
それは夏のある日、プールのスタート地点に三人の少女の姿があつた。

「せつかくだから、この三人に中で一番タイムが早い人を探してみたいの。」

川田先生はこじりと笑いながらストップウォッチを取り出す。

「でも不公平ですよ、先生。」

「そうです！私と咲野さんはともかく、どうして塚原先輩なんですか！？」

「いいじゃない、咲野さんも高嶺さんも同着だつたし。」

「いや、先生。私も不公平だと…。」

「あら、実は一人共責方の一年前の自己ベストを若干上回っているのよ。」

「え！…本当ですか？」

「ええ、本当よ。」

「これはいい逸材ですね先生。」

「ええ、でも尺が短いからそろそろはじめるわよ…。」

「尺つてなんですか！？」

「位置について…！」

「よーい、スタート！…」

勝手に始まつた水泳レースは

序盤から咲野さんと高嶺さんの攻防が繰り広げられた。等の塙原先輩は余裕のいきおい自分で自分のペースで泳いでいた。

「早い…。」

プールに来た七咲は食い入る様にそれを見つめた。

ターンのあと、ついに塙原先輩が奇襲をかけた。一気に詰め寄られ、ついには一着でゴールした。

「おおーーー！」

「塙原先輩はやーーいーー！」

「うう…悔しいです。」

こうして第一回ポニー・テール選手権は幕を閉じた。

作者の好きなキャラ&投票結果中間発表

つい先日

「結局のところ、お前は誰が好きなんだ」と言われたので

作者の好きなキャラランキング！！

五位から

五位は里中なるみ、結構いいうどんです！！

四位は咲野明日夏、ザツツアスカターン！！ああゆう子は好きです。三位は高嶺愛花、硬派な子をテレさせるとテレ愛花がストライク。二位は祇条深月、禁断の恋なの～と世間知らずかんがもうナイス！！

そして第一位は

中多紗江！！

あんまり人気ないらしいが良くわかりません。
紗江ちゃん！！いや～紗江ちゃんイイですねえ。

フツカフカですね。

さて

ここでキャラ投票結果中間発表をしまーす！！

では五位から

五位は1票で

上崎理沙、栗生恵、小早川凜子でしたー！！

四位、2票で

絢辻詞！！

三位は3票で

二見英理子！！

二位は4票で

森島はるか、棚町薰でした。

一位！！！5票獲得で七咲逢！！

でした～

おっと

この次回作ヒロインの投票の仕方ですが

一人持ち票を三つまでとして

感想欄に好きなキャラの名前と

そのキャラに何票入れるか名前の横に書いてください。

例1)

中多紗江 3票

のように一人に3票入れてもいいですし、

例2)

祇条深月 2票

咲野明日夏 1票

例3)

水澤摩央 1票

里仲なるみ 1票

上崎理沙 1票

と分割で入れても構いません。

なお、

メインキャラクターは勿論

上崎理沙、塚原響、田中恵子、小早川美千、川田先生、高橋先生等のサブキャラクターの投票も受け付けています！！
あ…いや流石に里仲のおじいちゃんはダメだからね…
なお、男キャラはメインまでお願いします。

カナヅチ少女の共通点？

「水泳の補習…だよね。」

それは夏のある日、プールのスタート地点に三人の少女の姿があつた。

「せっかくだから、この三人に中で一番カナヅチを探してみた
いの。」

川田先生はにっこりと笑いながらストップウォッチを取り出す。

「あの…先生、私…一年生ですけど…。」

「うん…私も一年生だけど、姉ヶ崎先輩もだなんて、それはないよ
。」

「ほらほら、桜井さんも中多さんも、今日は合同の補習って事で。」

「はーい。」

三人はスタート台で準備運動を始めた。

「あれ？川田先生、また始めたんですか？」

七咲は制服のままプールに来た。

「ええ、本当は一見さんも来る予定だつたんだけど…。」

「一見先輩ですか？」

「そう…でも予定が合わなくてね。」

「なるほど…。」

「それにしてもこの三人が並ぶと空気が違いますね。」

「そうね…確かに出てるトコ出てるわよね…。」

「はい。」

準備運動を終えた三人は合図を出す。

「せい」

「位置について——よ——いスタート——！」

バジャツと壇の赤しぶきが上がり三人が永治始め

いや、助けて。

卷之三

と全く前に進めなかつた。

三人はなんとか無事にプールサイドに辿り着いた。

ハアハア

こうして第一回カナヅチ爆弾少女対決は幕を閉じたのだった。

執筆裏話 棚町薰編

今回も懲りらずに始まりました執筆裏話のお時間です。

ちゅうじー週間前くらいに

PUBとHIDEコレ+版のアマガミを買って
嫁の紗江ちゃんと次回作ヒロインの七咲をスキBESTでクリアし
ました。

とまあやつ言ひ話なのですが

なんせアマガミのソフトの方に問題がありまして…
まさかの

初回限定版！！

…。

祇条さんのクリアポスター当たって
完全にそれ当てです！！

ええ！－本当は祇条さん当たってるの…－－－！

そして棚町薰編は全く資料がござしく

棚町ファンに土下座しなくてはならない結果でどうもすみませんで
した…

今後善処いたします。

えつとキャラクター投票なのですが

相変わらずの投票率に頭を抱えています。

お仮に入り登録もしなくていいです
ゴーザーさんでなくとも書き込めるよ!ってありますから

どうかよろしくお願ひします!!

そうだー！～ソにキスしよ～！～ 休1イベ（前書き）

ちよつと男のロマンを詰め込みすぎでいいので
苦手な方は七咲編へお飛びくださいませ!!

やうだー！へソにキスしよー！ 休ーイベ

「おうおう大将…。」

「どうした？ 梅原…。」

「あいやな… お前、結局棚町のへソにキスしていないだろ？」

「え！… そういえば…！」

「まあ棚町ファンつつたらへソキスシーンが欲しいトコだしな、
せつかくだからこうひんな女子のへソにキスしたらどうだ？」

「ええっ…！」

「わーて妄想開始だぜ…！」

姉ヶ崎寧々の場合

「寧々さん…。」

「本当にすみの？ へソキス…。」

「はー…。」

「もう、悪い子なんだあ… お姉さん貴方がそんな悪い子になつて悲
しいなあ。」

「あ…えっと…。」

「ふふ、照れちやつて… もう…。」

「じゃ…じゃあ。」

「うん… いこよお…。」

「…ちゅ…。」

「あつ…。」

「ね、寧々さん…。」

「あつ…だつてえ… んついい…。」

「…んつちゅ…。」

「はあんつ… もう、ダメつてえ…。」

「まだまだです。」

「へへ…あははひめり…はうい。」

「おこ…梅原…！」

「おーっとおつと、これじやあノ指定になつちまつなあつはははー…！」

「はあ…でも姉ヶ崎先輩、いいなあ。」

「待て待て…」この妄想も一人で終わると思つたりやこないだらうなあ？」

「へ？じやあ。」

里仲なるみの場合

「えー！先輩…私のおへそにチューするんですか？」

「いい…かな？」

「…せ、先輩なら、いい…ですっ。」

「じや…じやあ。」

「あつ…先輩、恥ずかしいです…。」

「！」めん、それじやあ。」

「んつ…ふふ。」

「ちゅ…。」

「やつへ…くすぐつたいです先ぱ…ふふ。」

「…んつちゅ…。」

「あははくすぐつた…ひゃんつ…あつ…。」

「…梅原、絶対なるみちゃんつてへソにキスされるの弱いつて…。
「だな…。まあ今回はこここまでにするか…！次回も妄想広げるぜ…！
「大将？」

「ああ…。」

空色プールサイド1（前書き）

七咲 逢《ななさき あい》

クラス：1年B組

部活：水泳部

血液型：O型

年齢：15歳

誕生日：2月21日

星座：魚座

好きな事：海・部活・夜（静かだから）・弟

苦手な事：うるさい場所や人・病院・数学

家族：父・母・弟

通学手段：徒步

美也や紗江のクラスメイト。

普段はポーカーフェイスで口数も少なく、クールな態度を取る。

実際は温和で、人情深く面倒見が良い。

共働きの両親を手伝つて夕食を作つたり、年の離れた弟の面倒を見たりと家庭的な一面も見せている。

料理上手。

運動神経抜群で、水泳部では大型ルーキーとして期待されている。だが決してそれに驕ることはなく、人知れず放課後に練習したり河原で走り込んだりと、かなりの努力家。

その反面、頭の回転は早いものの勉強は不得意で、歩くのはあまり速くない。

空色プールサイド1

それは僕が初めて女の子をクリスマスパーティーに誘つたあの夜の事。

独りトボトボと家に向かつ最中、
曲がり角から人が飛び出して来た。

「うわっ！！」

「きやあ！！」

「ドンッ」と体当たりをかまされて
フラフラだった僕の方が転んでしまった。

「あ…大丈夫ですか？」

「ああ、君こそ、怪我はなかつた？」

「はい！…ではすみません！…」

その女の子は僕にペコッと頭を下げると
一歩散に退散した。

これはそれから一年後のお話。

「よう、大将！…元気ないなあ？」

「ああ、おはよう梅原。」

「おうよ、はあ…あと一ヶ月でクリスマスだつてやつのことや…」

「そうだな…。」

「だからうつ…今年はかわい子ちゃんとクリスマスパーティーだぜ…！」

「！」

「…。」

「橋…お前にいつまでもウジウジしてちやダメだぜ？」

「そんな事…言われても…。」

「わかつてゐる、充分わかつてゐるぜ大将！！お前が苦しいのはわかるがな、ここは男の意地にかけて女の子にアタックだ！！いつまでもそうしてちゃダメだぞ！！」

「う…うん。」

空色プールサイド2（前書き）

「こんにちは、作者です！！」

皆様からの沢山の「」感想、「」意見をいただき誠に嬉しい次第で「」を
います（深々
つでもつて

皆様にお知らせが「」ります！！

ただいま、作者 f a f u n a r v は、アマキス・プラス+の更新情
報を Twitter に上げています

活動報告等もそちらに記載したいと考えております。
よろしければ、 f a f u n a r v にて御検索いただき
フォロー頂ければ幸いと思つております。

長々と申し訳「」ませんが

これでお知らせを終わりにさせで…

「えいやつーー！」

「うわ…って美也ちゃん？」

「どうしたんですか？」

「ハッしししー、作者さんキャラ投票の宣伝、忘れてない？」

「ああ、そうですねそうですね
じゃあ、せつかくですし
美也ちゃんにお願いします。

「え？みやーー？」

「はー

「じゃあ、えっと…ただいまアマキス・プラス+では次回作ヒロイ
ンの投票を行っているのだつ！…詳細は作者さんの活動報告ページ
に載せてあるみたいだから見てねー！…ねえ作者さん！…」

なんですか？

「みやーも投票していいかな？」

はい、どうぞどうぞ。

「こしきー、誰にしようかなあ～。」

ふふ、では七咲編に戻ります

皆様、どうぞよろしくお願ひします！――

空色プールサイド2

梅原もああ言つてたけど
僕ははつきり言つて自信はない
「また同じ結果になるんじや…。」

あの冬の寒さがぶり返すように

この学校の渡り廊下も…

渡り廊下?

「どうして僕は渡り廊下にいるんだ?」

しかも体育館に向かう渡り廊下じゃないか!!!

「さつむー…早く…早くもどらないと…!!」

わけも分からず玄関に向けて走り出す。

「！」の扉をくぐれば校舎だし、少しはあつたかい筈だ…!!

扉にヒターンを仕掛けた

その瞬間だった。

「キヤツ!!」

「うわっ!!」

ドン

と柔らかい感触が胸に伝わると

その後すぐに離れて、黒髪の少女が廊下に叩きつけられた。

「！」…ごめん、頭打つてないかい？

「あ…はい、大丈夫です。そちらは大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だよ。」

「では私は急いでいますので失礼します。」

「ああ、僕も急いで帰らないとな…。」

空色プールサイド3

昨日の渡り廊下が祟つたのか
朝からどうもお腹の調子が悪い。

「あんた今日何回目よ?」

「あ…薰。」

「そんなお腹痛いなら保健室行けばいいじゃなし…。」

「それもそうだな、じゃあ、僕行つて来るよ。」

「いつてらっしゃーい。」

ヨタヨタと歩きながら

壁伝いに保健室を目指す。

階段を降り切つてドアを開けた。

「失礼しまー…すう…。」

予想通り先生はいない

僕は適当に薬を漁つて

腹痛に効くものを見つけていた。

「失礼します。」

「え?」

「…。」

左のひざに包帯を巻いた昨日の女の子が入ってきた。

「あ…君は昨日の。」

「…絆創膏ください。」

「へ?」

「絆創膏です、大きめの奴です。」

「ああ、了解了解。」

僕は絆創膏を渡した。

「備品をもらつたら名簿に名前と用途を書いてね。」

「わかりました。」

「ねえ…。」

「はい?」

「そのキズは昨日の…。」

「…はい。」

「じゃ…やつぱり怪我させちゃつたね…ごめん。」

「いえ、たいしたことないですかから。」

「…ああ、なら良かつたよ。」

僕はやつとのことで薬を見つけると

コップに水を入れて飲んだ。

「…イタツ。」

「大丈ぶ…ブツ…！」

振り向いて見えた光景は
彼女が一生懸命絆創膏を貼り替えている
その脚の隙間から見えた
黒いアレだった。

「ど…見てるんですか?」

「い…いや…はは…。」

「…人に怪我をさせて、治療中の最中にそういうことするんですか?

?」

「そ、そんな訳ないだろ?…!…」

「じゃあ、どこ見てたんですか?」

「…ぐつ。」

「…。」

「き…君。」

「私ですか？」

「辛そうだからひたすらあはは。」

「…。」

「うう…。」

さすがに不味い空気になった。

早くここから退散しないと。

「私の心配をしてくれたんですか？」

「あ…うん。」

「そうですか、私は七咲、1Bの七咲逢です。」

「え？ 一年生なの？」

「はい。」

「僕は一年A組の橘純一だ。」

「一年生だったなんですか？」

「え…いやまあ。」

「てっきり一年生かと思いました。」

「うぐぐ…。」

「じゃあ私はこれで。」

そうこうと七咲は保健室を出て行った。

空色プールサイド4

今朝は何かが違った

そうーー！

「いじ…これは…。」

そう

そうこれだーー！

ラブレターとやらだ…

「ええ…えつとなになにっ校舎裏で待ち合わせ…。」

それを読んだ僕の体は
一直線に校舎裏へ動いた。

「うおおおおーー！」

クリスマスの傷心が

こんな形で晴れようとは思つてもみなかつた。

「はあ…はあ…あつーーー！」

「へ？」

そこには一人佇む七咲の姿があつた。

「君…だつたのかい？」

「え…は…はあ。」

「出逢つてまだ一日しか経つてないつて言つのに…。」

「そう…ですね。」

「愛の告白だなんて…。」

「何をいつてらつしゃるんですか？」

「何をいつてラブレターをラブレター…。」

「あの…。」

「どうした…言い辛いかい?」

「いえ、それ、私は出しませんけど。」

「へ?」

「はい。」

「い…いやだつてほり、校舎裏に…。」

「はははは!…傑作だぜ大将!…」

「うわっ…梅原!…まさかこの手紙!…」

「ぶははは!…そうだよそうそう、その手紙は前の仕返しだあ!…」

「…えつと、状況が良く飲めないんですけど?」

七咲が間に入った。

「あ…ああ、悪かつたな七咲、俺は梅原だ。」

「え…もしかして美也ちゃんが言つてたお兄さんの友達…。」

「美也と知り合いなのか?」

「へ…じや…じやあ美也ちゃんのお兄さんって橘先輩だったんですね?」

「か?」

「ああ。」

「お前の妹はいいなあ、人脈深くてよつ。」

「いや~まあ。」

「それより、七咲にどうしてこいつなったか説明しなくちゃな。」

「あ、はい。」

梅原がしゃべり終えると

七咲は少しあきれ顔になった。

「おバカな二人ですね…。」

「うぐっ…。」

「ふふいい意味でですよ。」

七咲はそつと出て去つて行つた。

その日の夕方だった。

「お兄ちゃん！？」

「え？…美也？」

「うん！…これから帰りでしょう？」

「ああ、どうした？」

「これから友達と一緒に帰るんだけど、お兄ちゃんも一緒に帰らう？」

「おう、邪魔じゃないなら一緒に行くか。」

「うん！…あ…逢ちゃん！…」」」」」

「…橘先輩。」

「ふえ？…もう一人知り合いなの？」

「うん、」」の怪我は橘先輩とぶつかってできちゃって。」

「ええ！…お兄ちゃん逢ちゃんになんて事したのっ…！」

「待て美也、確かに僕が悪かつた…けどな」

「いえ、私も注意していれば怪我なんてしませんでしたし…」

「お兄ちゃんは逢ちゃんの部活を知らないからかるーく言えるんだよつ！」

「え？…どうこいつ」と？」

「逢ちゃんは水泳部のHースなのだ…！」

「ちょ…ちょつと美也ちゃん…。」

「そうだったのか七咲…。」

僕が言い寄ると七咲は苦い顔をした。

「いえ、そんな大それた者じゃありませんから…。」

「…そつか。」

しばらく三人でしーんとなっていたが

美也がほら帰ろうと一言掛けたので二人して驚きながら顔を見た。

「「めんな…七咲。」
「気にしてませんつてば。」
「いや、なんだか申し訳が立たなくてね…。」
「じゃあ、後でその申し訳の分をキッチリと立てて貰いますから今はいいですよ。」
「はい…。」
「はい…。」

いつもの商店街のアーケードをくぐるとなにやらゲームセンターの方で声が聞こえた。
「てめえ何したかわかつてんのかよおい…！」
「…。」
「ガキだからって容赦しねえぞ、おいリコウタやつちまおつぜ。」
小さい男の子を取り囲んで
二人のバツの悪い不良が捲し立てている。

「い…郁夫…！」
「え？」
七咲が声を上げた。
「郁夫…！…なにやつてるの…！」
「お…おい七咲…！」
慌てて七咲は不良の中の男の子を庇う。
不良はニヤつきながら七咲に迫る。

「おいおい、そのガキンちよのねえちゃんか？」
「弟君にこつちは大迷惑なんだよね～。」
「すみません…。ほら郁夫も謝つて…。」
「ちょっと待てよ、謝つただけで済ませる訳ないだろ？」

「え…。」

「きちんと体で払つて貰つとするか…。」

「ちょっとソロ、さつきからうるさいんだけど。」震える七咲の前に女の子が割つて入る。

「おいおいまたねえちゃんかよ。」

「で、お前は何しに来た訳?」

「同じ学校の子が絡まれてたら、普通たすけるし…。」

「絡まれて?はあ、バカ言つてんじゃ…」

不良の一人が女の子に近寄るとお腹を押さえて倒れてしまった。

「てめえ殴りやがったな!!」

もう一人の不良が女の子目掛けて拳を振り上げた時僕は七咲と女の子の前に立つて降りかかる拳を受け止めた。

「女の子に一対一は卑怯だぞ…。」

「…橘先輩。」

「七咲と君は逃げる、後は俺がなんとかするつ…!!」

「あ、くそつ逃がすかっ!!」

「そうはいかないぞ…!!」

「離せつてめえ!!」

「ぐあ…！」

鳩尾に膝が叩き込まれる。
痛すぎて正直動けないが

必死の抵抗で、四人が見えなくなるまで耐えた。

「これでいいなっ…。」

「くそつあいつらがいねえんじや話になんねえ。」

二人の不良はようよろと歩き出した。

空色プールサイド6

ヨタヨタ歩きでみんなが逃げた方向を歩いていると
美也が路地裏から手招きをしていた。

「にいに…大丈夫？」

「ああ、それよりも怪我ないか？」

「う…うん。」

七咲も女の子も無事な様だ。

「あんた見た目よりも男らしいじゃん？」

「いや、あれはとっさに体が動いてね。」

「ふーん、あんたもリンゴと同じ学校？」

「ああ、君はリンゴって言うのか。」

「べつ別にいいじゃん！…リンゴはリンゴだから。」

「そつか、僕は橘純一、そっちが妹の美也とその友達の七咲…で、弟？」

「はい、弟の郁夫です。」

「へへ…、アタシ凜子、小早川凜子。」

「さつきはありがとうな小早川。」

「へへ…あいつら、リンゴが格ゲーでコテンパンにしたら怒っちゃつたみたいで…。」

「え？…さつきあいつら、郁夫君の事を攻めてたんだけど…。」

「…へ？…そつか、郁夫君がやつてたのか…。」

小早川は一人納得した様に頷いた。

「郁夫が何かしたんですか？」
「ん…レバーを弄つたんじゃない？」
「レバー？つて何、にいに。」

「レバーは格ゲーの筐体に付いてるあの棒の事だよ。つまり、郁夫君は人がやつてる格ゲーのレバーを弄くつたから、怒られていたんだな…。」

「い…郁夫、どうしてそんなイタズラしたの……」「…。」

「まあいいじゃないか七咲、後で僕が郁夫君に格ゲー教えてあげるからさ。本当は郁夫君、格ゲーやりたかったんだろ?」「…うん。」

「そつかそつか、な…今回はそつこうことで許してあげな、七咲。」「は…」。」じめんね郁夫、お姉ちゃんが遊んであげられなくて…。」

「…うん、お兄ちゃんが遊んでくれるから嬉しい…！」「

「いいなあ～みやーも弟欲しい…凛子ちゃんもそう思つでしょ?」「実はリンク、弟いるんだ。」

「え? いいなあ～。」

「再婚相手のお母さんの子供だから義理の弟だけどね。」「そつなんだ…。」

「もう…暗い顔しなくていいじゃん…！」

「うん…じゃあさ、今度みやーに見せてよ！…」

「いいよえつと、そつちの七咲って子も来たら?」「私?」

「うん、郁夫君も快と仲良くなれんだろ?」

「そうですね、じゃあお邪魔させて貰います。」

小早川は満足そうに笑つて背伸びした。

「さーて、そろそろリンクも帰らなくちゃね、じゃあ…！」

「ああ氣をつけて帰れよ小早川。」「

「わかつてるつつーの…！」

「じゃあ僕達も帰るか。」

「うん…。」

空色プールサイド7（前書き）

作者スランプ中で「いやこまよ…」
ちょっと考える時間つて事で停滞するかも知れませんが
お願いします…

空色プールサイド7

「あ…おはよう七咲…！」

「え？あ…おはようござります先輩。」

「郁夫君何かいってたか？怖がってなかつた？」

「ええ、大丈夫です。それよりも、お兄ちゃんにゲーム教えてもらうんだーつて、母に自慢していました。」

「そつか、喜んで貰えて何よりだよ。」

「はい…あの、昨日はあの状況で上手く言えなかつたのですが、ありがとうございました。」

「え…ああいいさ、気にしないで。」

「あの、蹴られたところ…。」

「ああ…大丈夫大丈夫！！」

「そつ…ですか。では失礼します。」

七咲はぺこりと頭を下げる
玄関に走つて行つた。

「僕もそろそろいかないとな…。」
玄関を抜けて教室に向かつた。

「おはようー！橘君ー！」

「え？あ、おはよう咲野さん。」

「うん、昨日ゲームセンターのところにいなかつた？」

「え…うん。」

「部活帰りで途中で見かけたんだけど、大丈夫だった？」

「ああ…大丈夫さ。」

「よかつた～。逢ちゃんに手を出してたみたいで。」

「え？ 咲野さんって七咲と知り合いでですか？」

「うん！！私はサッカー部と水泳部の掛け持ちだから。」

「へえ～。」

「塙原先輩が、咲野さんもコッチに入つて欲しいわね……って言ってたけど……。」

「けど？」

「私にはサッカーがあるから。」

「そうか。咲野さん、サッカー一筋だもんね。」

「うん！～！」

咲野さんはこいつ笑った。

「逢ちゃん独りだと危ないけど、ちゃんと貴方が見守つてあげてね

！～！」

「はい。」

「どうしてだの？…。」

昨日、お腹痛くて保健室に行つて
でも最終的に蹴られたから…

「どうも調子悪いな…。」

僕は保健室のドアを開けた。

「あ…。」

見ない顔だった。

三年生だろうか？

「君、どうしたの？」

「あ…いえ、お腹痛くて、薬を。」

「そつか、えーっとさつき使つたからそこかな…。」

「あ、ありがとうございます。」

その先輩は僕をジッと見つめていた。

「えつと…僕の顔に何か付いてますかね？」

「え…ああ、ゴメンね。備品のファイルに名前を書いて頂戴。」

「は…。」

僕が名前を書き終わると

その先輩はパツと立ち上がった。

「君、橘純一君？」

「あ…はい。」

「私は水泳部の塚原響よ。」

「あ、あの…。」

七咲の怪我について

何か言われるのじゃないかと思つた。

「君が七咲とぶつかつた男の子か……。」

「いえ、あの…すみません……。」

「どうしたの?」

「七咲の部活の邪魔になつてすみませんでした!!」

「いや、対した怪我じやないから部活に支障はないよ。」

「あ…そう…でしたか。」

「うん、ほら摩央!! もう時間よ…。」

「ふあ~…。」

「せつからく話そうと思つたけど、私たちは実験だから早く支度しなくちゃなの。」

「あ…そうでしたか…。」

「ええ、悪いけどまた話させてね?」

「はい。」

そうこうと塚原先輩は水澤先輩を叩き起しして去つていった。

昼御飯を買いに食堂に出掛けると廊下の向こうから小早川が歩いて来た。

「あ……橘じやん。」

「おい小早川、先輩に言つていい事と悪い事があるんじゃないか?」

「だつて橘じやん。」

「小早川……」

今度は僕の後ろから七咲がやつて來た。

「楽しそうですね先輩。」

「……楽しそうに見えるか?」

「はい……私は楽しいです。ね? 凜子ちゃん。」

「うん……リンゴも楽しい……！」

「おまえらああああ……！」

僕と二人がじやれあつている所に案の定美也がやつて來てしまった。

「お兄ちゃん!! 何やつてんの……！」

「ふえ? あの人気が美也ちゃんのお兄さん?」

「そうだよ紗江ちゃん!! ハロハロ攻撃してお兄ちゃん……近寄る
と食べられちゃうよ……！」

「ええ! ? 私……」

「でもなんだかじやれあつてるだけじゃ無いの?」

「なるみちゃん甘いよー!! あれはハロハロ攻撃なんだから!! ……！」

「美也……」

「ひえ……こいつち来るな……！」

「煩い!! 散々バカにしやがつて……！」

「みやーは本当の事……！」

「何が本当の事だ……！」

「こりら……橘君……！」

そして高橋先生に見つかり
みんな揃ってシゴかれた。

「でも…先輩、私たちは悪くないって一生懸命だつたね…。」

「そうだね、でも私も美也ちゃんと一緒だつたし。」

「うん、橋先輩、この三人は関係無いんですって言つて結局高橋先生の怒りを買つちゃつたけどね…。」

中多さんとなるみちゃんと相原さんは
まだ小言の絶えない生徒指導室を後にした。

昼の一件からか

高橋先生の「機嫌も斜めだ。

「はい、次、橘君。」

「太閤検地です。」

「はい、理由を言つて。」

「年貢を上手く確保するためです。」

「はい、次のウに入るのは？ 橘君。」

「人掃令です。」

「エ！？」

「朝鮮出兵です。」

「次！？」

「バテレン追放令です。」

「次！？」

⋮

「大将…今日はヤケに麻耶ちゃんにシジコかれたなあ。」

「うう…梅原あ…。」

「なにをくじたれちまつて…、大変だつたな？」

「ああ…。」

「よー！純一…お密さんよーん。」

薰がグニャグニヤになつてゐる僕に近づいてそつと語つた。

「僕に？」

「先輩！？」

「な…七咲？」

教室の視線が一気に僕に向けられる。

「い…移動しようか?」

「はい…」

僕と七咲は人目を避けて屋上へ向かつた。

「えつと…どうした?」

「…あ、さつきの事を謝ろうと思いまして…。」

「ああ…いっていいって。」

「で…でしたら何か…。」

「じゃあさ、七咲の事を話して貰いたいんだけど…。」

「え? 私ですか?」

「ああ…ほら出身の小学校とかつて。」

「あ、そういう事でしたか。私は輝日南小出身で郁夫も同じです。」

「え!! 七咲は輝日南だったの?」

「はい…。」

「実は僕も輝日南だつたんだ!!」

「そうなんですか、もしかしたらその時出会っていたかも知れませんね?」

「ああ…でも、あそこイカの滑り台があつたよね?」

「へ? 先輩、タコの間違いじゃないんですか?」

「いや絶対イカだよ!!」

「タコです!!」

「イカだよ!!」

「ぜーつたいタコです!!」

「じゃ…じゃあ、日曜の夜、確認に行こつ…。」

「ええ!! 絶対にタコの滑り台だつてこと、証明しますからね!!」

「望む所だ!!」

かくして

七條と田舎の夜に出掛けることになった。

田曜日になつた。

「ここに?出掛けの?」

「ああ…『めんな美也』ちよつと行つて来るか?」

「うん、いつてらつしゃーい。」

寝ぼけ眼の美也をやりすゞと

僕は小学校に向かつた。

「おいお前! ! !

「…つやめてください! ! !

曲がり角の向こうから聞き覚えのある声が聞こえた。

「ゲーセンのときはよくもやつてくれたな?」

「…。」

「あやまねえ氣かよ! ! !

「つ…。」

「ちつ…じゃあサクッと体でケリつけるか?」

「いやです…。」

「いやですじやねえよ! ! !

僕は走つてその声の場所へ向かつた。

「おい! ! !

「ああん?」

「先輩…。」

気が散つた不良の隙を見て

七咲は足を縛れさせながらもこづらに走つて來た。

「んだよてめえ! ! また蹴られてえか! ! !

「そんな事でいちいち女の子に手を挙げても仕方ないと思わないか

「……」

「つるせえ……やるなら来やがれ……じゃねえと俺がボコボコにしてやる……」

「……七咲、学校に行くのは来週にしよう、僕が頭を触つたら全力で逃げる……。」

「でも先輩……。」

「いいから。いくぞ……。」

僕は七咲の頭を軽く叩くと不良田掛けで突進した。

七咲も暗い夜道へ逃げて行つた。

「くそっ……てめえだけでもぶつ飛ばしてやる……。」

不良の拳が左の頬に叩き込まれた。

「ぐあ……。」

「けつ、口程でもないな、うんっ……。」

倒れた僕のお腹に容赦なく蹴りが入る。

「うりや……くそが……うんっ……。」

「いっつ……。」

数分経つただろつか

後ろから自転車が走つて來た。

「そここの君……警察だ……大人しくしなさい……。」

「やべえ……ボリスだ……。」

不良は蹴るのを止めると
一目散に逃げて行つた。

「先輩……大丈夫、ですか？」

「七咲……へへ、かつこ悪いな……ぐふう……。」

「どうして……どうして先輩はいつも……。」

「だつて、許せない……だろ?」

「先輩……。」

「七咲を怪我……させたの……僕だし。」

「先輩は…馬鹿です…。」

「ふふ…酷い、な…七咲は…。」

「馬鹿…馬鹿あ…せんぱい…怖かつたです…。」

「大丈夫だから…泣くなつて。」

「先輩…。」

七咲は震える体を僕の腕の中に寄りかけた。

空色プールサイド12

暗い夜道を一人で歩く。

街灯に照らされるたび七咲の顔は暗くなる。

「先輩…。」

「いいつて、言いたい事はわかってるかい。」

「…」「めんなれ」

「悪かったな…七咲。」

「どうして…。」

「ん？」

「どうして先輩は私なんかに…。」

「…ほら、咲野さんに言われてさ。七咲守つてあげるって。」

「…それとこれとは、」

「関係あるせ、一人で抱えてどうするへ。」

「…。」

「七咲。」

「はい？」

「タコの滑り台、もっかい見に行こうな？」

「…はいっ！－」

七咲の顔がやつと晴れてくれた。

「先輩。」

「ん？」

「今日の先輩、かつこ良かつたです…。」

「え？あ…そ…う…はは…。」

「ふふ、嘘です。」

「お…おい…なんだよそれ－－－」

「御世辞にもなりませんね。」

「ひでーな。」

「当然です！…」

「うう…。」

「ふふ、今度は私が誘つていいですか？」

「え？あ…うん。」

「じゃあ臨海駅近くの公園に行きたいです。」

「おう？ まかせとけて？」

「じゃあ、今田はありがとうございました…。」

「ああ、」

七咲は小走りで去つて行く途中で「さうに何か行つたようだが
その言葉は僕の耳に届かなかつた。

「おはよー! わたす先輩……」

「おはよ…。」

と七咲の声に反応したのに

とうの七咲は塙原先輩の方に走つて行つてしまつた。

「櫛先輩……」

「え?」

「もうお兄ちゃん、逢ちゃんの声にばーっかり反応してる…。」

「くく、不意をつかれちゃいましたね先輩。」

「美也… 友達がいる前でやめてくれよ…。」

「逢ちゃんが最近みやーにお兄ちゃんの事聞くようになつたからなんとか隠しこと思つたのだ…。」

「だからいつてー…。」

「くく、兄弟つていいですね。」

「なるちやんはひとり子だもんね。」

「うん、菜々ちゃんと美也ちゃんにはお兄さんがいて、逢ちゃんと凜子ちゃんには弟がいて、あたしと紗江ちゃんがひとり子だもんね。」

「でもお兄ちゃんがこて壇するよ~。」

「おい美也つ…。」

「えー…絶対お兄かわよがいたら乐しこもん…。」

「お兄ちゃんなんてコソコソ…ふぐぐ…。」

「あはは… 美也、お前に話があるんだよーほり里中さんは遅れちゃうからお先にどひどひ。」

「ふぐぐ…ふぐぐーつー…ふつ…ふつ…。」

「えへへ…じゅ、じゅあね美也ちゃん。」

里中さんは小走りで校門に入つて行つた。

「そーて美也…。」

「じゃ、じゃあみやーもお先になのだーー！」

「までこりああああーー！」

その日のお題だった。

「大将、お密さんだぜ？」

「え？」

僕が見た先に、七咲がいた。

「先輩、ちょっとといいでですか？」

「ああ、いいよ。」

「今日、郁夫とゲームセンターに行く予定なので、先輩も来ていただきますか？」

「あれ？ 七咲は部活なんじや？」

「ええ、終わってから行きますので、待っていていただいていいですか？」

「ああ、じゃあ何処かで時間潰そうかな。」

「はい、ありがとうございます。では失礼します。」

「ああ、じゃあまた放課後にな。」

「はい！…」

七咲はぺこりと頭を下げると
ひとの中に消えて行つた。

「さてと、じゃあどこで過／＼しつかな…。」

僕が後ろを振り向くと一人の先輩がニヤニヤしながら近づいて來た。

「ちょっとあんた、放課後暇ならちょっとあたしらの手伝い、してくれないか？」

「求人募集…。」

「は？え…えっとビビちゃん様で？」

「ふふーん、何を隠そつ茶道部の夕月瑠璃子と一緒に？」

「飛羽愛歌…。」

「へえ…。」

「ああーるつこ先輩にまなか先輩い…！」

「ようりほっち…！」

お間抜けな声を上げて走って来たのは
幼馴染の梨穂子だった。

「あれー？ 純一どうしたの？」

「梨穂子こねどうしたんだ？」

「まあまあ、りほっちは茶道部期待の部員だからねえ。」

「茶道ルーキー。」

「まあ顔見知りつてことでや、頼むよ。」

「…事と次第に寄りますよ？」

「あつはは、大丈夫さ！…やましい事なんてしないから…！」

「…じやあ暇なんで手伝いますよ。」

「よーーじじやあ放課後にテラスでな…！」

「現地集合。」

「はい。」

またいやな予感しかないと思えるのは
先輩のニヤついた顔が原因だと思つた。

結局流されるままにテラスに向かつた。

「お、結構早い到着だな。」

「あれ？ 梨穂子は来てないんですか？」

「遅刻確定。」

「はあ…これじゃ次期部長候補も困るよね…。」

「あはは…。」

「んじゃまあ始めるか。」

そつと夕月先輩は木の骨組みのテーブルを指差した。

「コタツヤ、これを部室に運んでくれ。」

「あ、それならお安いごようですよ…よいしょっと。」

「マッヂョムキムキ…。」

「そんなんじやないですよ…結構軽いですから。」

「へー…軽いか…。」

「ええ、」

「で本題なんだが…。」

夕月先輩は唐突に質問を始めた。

「あの七咲つて女の子、塚原響のお気に入りみたいでな。」

「ええ、」

「ほんなどうちやなんだが、最近不調らしいのを耳にしちゃ。」

「…はあ

「塚原が凄い心配をしてな、あたしらにも何かわかるかつて聞くくらいだからな。」

「…そんなに不調なんですか？」

「スランプとは違う…。」

「…そんなに不調なんですか？」

「うーん。」

「もちろん、あんただけに問題があるわけじゃないだろ？が、一応見かけた分際だしな。」

「え？ 見かけたって？」

「あたしらの家は輝日南小学校の近くでな。」

「え！…じ…じゃあ。」

「ああ、あの一件はひやーんと知ってるよ。」

「うう…。」

「不純異性交遊…。」

「ちーー違いますーー。」

「まあビーナスしたもこい「うじたも、過ぎた事だし、変えれるのはあんた達だけってもんだ。」

「…。」

「あの後輩、大事にしなよ。」

「…はー。」

部屋までの道のつはとつもなく短かった。

そもそも茶道部室から逃げた僕は七咲が待つ為校舎裏へ向かつた。

「俺はお前が好きだ！！！」

「…いきなりなんなんですか？」

角の向こう側から男女の声が聞こえた。

「なあ、君は好きな人も恋人もいないんじゃないのか？」

「…それがどうしてあなたと関係あるんです？」

「君は最近、あの二年生と一緒にいるけど、結局はあいつ、君を怪我させたんだる？」

「…それは私の不注意、あなたには関係ないですから。」

「それにあいつといふと危ない！！聞いたんだぞ！…俺は、あいつといふと不良に目を付けられて…」

「それも私の不注意です。いい加減にしてください。」「待てよ…俺は純粋に君の事が…。」

「橋先輩の悪口を言う為に私に近づくながら帰つてください…。」

女の子の声は、確かに僕の名前を呼んだ。

「俺はあいつが危ないから君を…」

「…私は貴方とは付き合えません。ごめんなさい。」「チクショウ！…」

男子はそのまま花壇を抜けて走り去つて行つた。

「先輩、立ち聞きなんていい趣味ではないと思っていますよ。」「え？」

「ふふ、バレバレです。ちよつと部活も終わったので、一緒に帰りましょ~う?」

「あ…ああ。」

「もう先輩、何変な顔してるんですか?」

七咲の顔が近づく。

仄かなカルキの匂いが僕の鼻をくすぐる。

「七咲は…」

「はい?」

「いや、なんでもない…。」

「ふふ、よくわからない人ですね先輩。」

「うつ…言いづらい内容だつたからしようがないじゃないか。」

「じゃあそう言う事にしておきます!…」

「とことん酷いなあ七咲。」

「今気づいたんですか?」

「結構前から。」

「そうですか、でも先輩だけですよ。」

「え?」

七咲は振り向いて笑った。

「早く行かないと郁夫が可哀想ですよ。」

「…あ、ああ。」

七咲は終始明るい顔で話しかけてくれたが
僕は夕月先輩の言葉だけが頭の中に蔓延っていた。

「先輩！」

「あ？ ああ…なんだっけ？」

「…先輩、今日はいつ以上に変ですよ？」

「そう…かな？」

「…ツツ ノマないんですか？」

「…『じめん。』

「先輩…。」

「七咲、『じめんな…僕。』」

「私の部活の事ですよね？」

「う…ああ。」

「大丈夫です…！…あればただのスランプですから。」

「で…でも。」

「それとも私が告白されるとこを溢み聞きして、してやつたりつて思つてるんですか？」

「ち…違う…！」

「ふふ、必死ですね先輩。」

「な…七咲い。」

七咲がもう一度笑顔で話し始めた。

「で…ですね先輩。」

「ああ。」

「美也ちゃんがなるみちゃんの「ひびき」を食べて〜。」

「ああ。」

「まんま肉まん乗せたら美味しいかも～にしてしまって。」

「あはは。」

それから時間はあつといつ間に過ぎ去り、
七咲の家の前に着いていた。

空色プールサイド18

「郁夫！…郁夫おーーー！」

七咲は玄関を開けて郁夫君を呼んだ。

「…」

「いくよ郁夫。」

コクンとうなづいて

郁夫君は玄関を飛び出した。

「それじゃあ行きましょう？先輩。」

「ああ。」

僕が歩き出そうとすると

郁夫君は七咲と僕の手を取った。

「あ…。」

「ブラン!」

「ふふ、僕も良くやつたよ。」

「ええ、私も良くなりました。」

「…」

「行くよ七咲。せーのーーー！」

「それっーーー！」

手を上げると

郁夫君は宙に舞つた。

楽しそうに足を地面から離して
ワザと体重をかける。

「もうそろそろかな。」

ゲームセンターの前に着くと。

郁夫君は格ゲーの筐体に向かって走つて行つた。

「じゃあやろうか?」

「…。」

ブンッつと音が出るほど大きくなづいて五十円をいた。

「まずキャラクターを選んで?」

郁夫君はカーソルを動かして一通りキャラクターを見た。

「どれがいい?」

「…。」

「…マヂ?」

「…。」

投げキャラを選んだ郁夫君は早速バトルを始めた。

「せ…先輩。」

「いやあ…強いんだよこのキャラ…。」

「そ…そうですか。」

さすがにこんなデカ物を選んだら引かれるな
と心に思つた。

「ちなみに先輩はどんなキャラを使つんですか?」

「ん?ああ…この主人公だよ。」

「ガラナ?ですか?」

「そう…ガラナ・ザ・ブラックエイジ。」

「へえ…。強いんですねか?」

「う…たぶん。」

「…先輩。」

「え？」

「この台、相手が居ませんよ？」

「そ… そうだね。」

画面の右上の勝利数が10を超えていた。

「先輩。」

「わかったよ… 本気を見せてやるからな七咲…！」

「はい…！」

郁夫君の横に座つて五十円を入れた。

「ふふ、先輩ボロ負けですね…。」

「うう…七咲、面目ない…。」

「次はちゃんと勝つたところを見せてくださいね。」

「ああ。」

真冬の夜は早く
すでに日は沈んで
疲れきつて寝てしまつた郁夫君をおぶつて
いつもの道をゆっくりと帰つた。

「先輩…。」「ん?」
「先輩って不思議です。」
「…どうして?」

何かポーッと上を見上げていた七咲は、ハツと氣づいたかのようだ。

我に返つてブンブン手を振つた。

1

「な…なんでも無いですよ…」

卷之三

「えーっと先輩弱つちいのによく郁夫に教えるなんて言いましたね

۷

「酷いなー、あれはプロ！プロの犯行だよー！」

「……………」

「七咲い…。」

僕がへタれると七咲はニッコリと笑つた。

「先輩！！」

「ん？」

「今日もありがとうございましたーーー。」

「あ？… ああ。」

12月も後半に入つて来たそんなある日
僕を塚原先輩が訪ねて來た。

「君かな？ 橘君は…。」

「あ…はい。」

塚原先輩は終始じつと僕を見つめると
ふうと溜息をついた。

「最近、七咲と良く一緒に居るつて聞くんだけど、本当なのかな？」

「え…あはい。」

「そう…じゃあ君に相談があるんだけど、聞いてくれるかな？」

「は…はい。」

屋上へ向かつて歩き出す塚原先輩を僕は追つた。
重い鉄の扉を開けると厳しい寒さが肌を突く。

「橘君、单刀直入に言わせてもらひうナビ。」

「はい。」

「七咲にかかわらないであげて頂戴。」

「…。」

「…橘君。」

僕は夕月先輩の言葉を思い出した。

「やつぱりそうなんですね？」

「ん？」

「やつぱり七咲の泳ぎが変なんですね？」

「…ええ。」

「七咲…。」

「キツイ言い方かもしれないけど、君には…」

「塚原先輩！…」

扉が開いて七咲と咲野さんの姿が現れた。

七咲は僕と塚原先輩の間に駆け込むと、息を切らしながら塚原先輩の前で震えていた。

「…どうして。」

「七咲、一番良くわかっているのは貴方でしょ？」

「だからって…！塚原先輩…。」

咲野さんは僕の制服の袖を掴んで

ちょっと目配せをした。

ゆっくりと一人から離れる。

「…逢ちゃん、本当は地区予選に出場するスタメンに入っていたん
だけど…。」

「え…七咲が？」

「うん、だけど半月前から結構タイムが落ちちゃって…。」

七咲の必死の身振り手振りが見える。

「七咲も辛かつたのかな？」

「え？」

「僕といて、可能性を失つて…」

「私はそう思わないよ？」

「え？」

「だから私はあなたが行つた屋上に逢ちゃんを連れて来たんだよ？」

空色プールサイド21（前書き）

こんには

久々に登場！！作者でござります！！

今回の七咲編もそろそろ終盤です。

そこで恒例のキャラ人気投票の宣伝です！！

この小説では次のお話のメインヒロインを投票していただいて決めています！！

今のところ次回は初登場！！キミキスより我らがクールビューリイ

ーー見英理子が登場予定！！

森島先輩とは一票の差です！！

さてだれが次回のメインヒロインの座に座るのかー！！

どうぞ期待：

空色プールサイド21

「塚原先輩は何もわかつてません！！」
七咲の怒号が寒空に響いた。

「私が悪くても先輩は…橘先輩は悪くありません…」

「悪いとか悪くないの問題じやないの…！」

「塚原先輩はまるで橘先輩が私の邪魔を…」

「貴方は地区予選が掛かっているのよつ…一年生まで出し抜いて、落ちた人に申し訳ないという気持ちにはならないのつ…？」

「…それは。」

「どういう状況のかちゃんと理解しなさい。」

「そんなの私の実力が上だつたから落ちたんじゃないですかつ…！
どうして私ばっかり…？」

パシンッと

強く軽い音がすると、

七咲は左の頬を押さえて座り込んだ。

「…。」

塚原先輩はスタスターと扉を開くと
校舎の中に消えて行つた。

取り残された七咲は

顔をうずめながら泣いていた。

冬の空にただ一人の女の子の泣き声だけが虚しくこだました。

「七咲…」

「橘君…！」

「…や、咲野さんどうして？」

「…今行つても逢ちゃんには何も出来ないでしょ？」

「だからって……」

七咲は僕の声が聞こえたのか
一目散に扉を開けて逃げてしまった。

「七咲……」

「私だって辛いよ……橘君。」

その日の午後は、全く勉強に手が付かなかつた。放課後になつても気分は滅入るばかりだ。

家に帰つて自分の部屋の押し入れを開けた。そのまま布団の山に埋れた。

「にいに…逢ちゃんに何かしたの？」

ノックもせずに、美也が部屋に入つて來た。

「違う…。」

「…違くないもん、にいに、押し入れ入つてるし…。」

「…。」

「ねえにいに…みやー、逢ちゃんもにいにも寂しそうにしてたらやだよ。」

美也の声が震えていた。

「逢ちゃん、苦しいつて…にいに…逢ちゃん苦しいんだよ…。うつ…うつ。」

「…。」

「にいに…逢ちゃんはにいにこの事が好きなんだよ…。みやーも気づいてた…。みやーも…気づいてたよ…。好きな人がにいになのもわかつたよ…。みやーは一人とも大好きだから、いつも笑顔で居ないと嫌だよ…。みやー悲しいよ…。」

「美也…。」

「にいに、逢ちゃんは他の事を捨ててまでにいにが好きなんだよ。どうしてかわかんないけど、みやーは凄いと思つたよ…。ねえにいに、みやー、一人の笑顔が見たいよ。」

美也がゆっくり押し入れの戸を開けた。
くしゃくしゃになった小さな美也の体が
胸にのしかかってくる。

「元気だしてよ…にいに。」

学校に着いて早々、咲野さんが駆け寄つて來た。

「逢ちゃん、風邪引いちやつたみたい…。」

「え？ 七咲…。」

「うん、昨日あのあと部活を休んだみたいで、帰りの公園で塙原先輩が通るのを待つていたみたいなの…。」

「じゃ…じゃあ地区予選は？」

「うーん、今週の日曜日だから…どうかな？」

「日曜日…まだ水曜日だけど。」

「風邪が酷くなれば良いけど…。」

咲野さんは首を捻つて困った顔をしていた。

「あ…！」

「うわっ…！」

「あ、ゴメンゴメン…。」

「もう咲野さん…。」

「え、えっとさ、橘君はクリスマスは逢ちゃんと何処か行くの？」

「へ？ どうして…？」

「あ、えっとさ、創設祭で水泳部つていつもおでんを作つてるから。逢ちゃんも駆り出されるみたいだし。」

「ええっ！？」

「図星だつたか…。」

「えりい…。」

「まだ日は有るから、今日お見舞いにいつてなにか話せるなら話してほうがいいよ。」

「うん…ありがとう咲野さん…！」

空色プールサイド24

放課後、僕は七咲の家に向かつた。

一昨日行つたので、あまり迷わず着けた。

「すみません…七咲さんいらっしゃいますかー？」
「はーい…」

ドアをノックして声をかけると
中から女人人が現れた。

「あ…あの、どちら様でしようか？」
「あ…な、七咲さんの友達の兄の橘純一といいます。」「あら！…貴方が橘君なのーー！」
「はー…今日は七咲さんのお見舞いにと思って。」「ちょうど逢が起きた所なのよ、わせ、上がって頂戴。」「じゃ…じゃあ失礼します。」

フローリングの床は綺麗で

二階に上がり、七咲の部屋に向かつた。

「七咲、入つて大丈夫か？」

「え？…ええつとい、いいですよーー！」

七咲は慌てた様にガサガサと部屋を片付けたのか
ドアを開けるとベッドに腰掛ける七咲の顔が赤く火照っていた。

「あんまり無理しちゃダメだぞ。」
お見舞いのゼリーをナイトテーブルに置くと
七咲がこちらを向いて小さく微笑んだ。

「先輩が来てくれるっていう夢を見たんですよ。」

「へ…へえ…七咲、FBIの超能力捜査官に向いてるんじゃないかな？」

?

「先輩、それすつししく酷いです。」

「はは、冗談だよ。」

僕はスプーンを袋からだした。

「七咲はどれ食べる?」

「じゃあ…みかん。」

「うん、はい。」

ピッピッと上蓋をむくと
ほのかなみかんの匂いがした。

「先輩…。」

「ん?」

「今日、実は美也ちゃんからメール貰つて。」

「え?…美也から?」

「はい…クリスマスは創設祭終わつたらウチでパーティーしようつ
て。」

「…そう…なんだ。」

まさかクリスマスマステートを誘つ前に美也に先手を取られるとは予想
だにしなかつた。

「先輩、私、創設祭の前に少し時間があるんですけど…。」

「え?…そうなの?」

「はい…仕込みは前日にして、翌日は一時に集合なので。」

「あ…そななんだ…。」

七咲の顔が赤くなつた。

「ですから…その…先輩と…マステート…したいんです。」

ツルツと手からビニーが落ちしつなをギリギリでキャッチして七

咲を見た。

「い…いいのか？七咲。」

「ええ、お願ひします！…先輩！…」

「…よし、」

「へ？」

「じゃあ七咲が次の日曜日の水泳地区予選に出てくれるなら行こう！」

「…！」

「…え…私。」

「大丈夫、七咲なら出来る。塙原先輩も本当に七咲が頑張ったから惜しいと思ってたんだ。ほら、元気だしてさ。」

「はい…。」

そつそつぶやいた七咲の頭を軽く撫でてあげた。

次の日から七咲は学校に来た。

なんでも直ぐに風邪が治る体质だそうで
元気に小早川と弟漸に興じているのだそうだ。

「リンゴセー、美也ちゃんに誘われてバー・ティーしようつたら。」

「へえ…小早川もウチに来るのか？」

「まあそつ言つこと。先輩は梅原先輩んちでしょ？」

「え?…あそつか、僕は邪魔になっちゃうな…。」

「そそ、お兄ちゃんは空氣読むのが筋じやん。」

「う…ひどいなみんな。」

「今更?」

「…小早川、冗談もいい加減にしてくれよ?」

「うわつ怒つちゃつたよ…。」

「…梅原の所に行つて来よつ。」

「じゃ、リンゴは教室もじるーつと……」

小早川は廊下を駆け抜けて行つてしまつた。

「はあ…出来れば七咲と一緒に良かつたんだけどな…。」

「何が一緒に良いんですか?」

「うわつなな七咲!…!」

「さつきの聞いちゃいましたよ?」

「え…あ、そうなんだ。」

「はい、前のお返しですよ!…!」

「はは、そう言えばそう言つことも有つたね?」

「はい、あの時は結構焦つていたんですが…。」

「そんなに推しの強い奴だつたのか？」

「ええ、変な視線を感じて居たのですが、多分あの人ですね…。」

「へえ…七咲はモテるんだな？」

「そうでもないですよ?」

「ちょっと有るのか…。」

「う…。」

「初めて言いくるめられたな。」

「先輩つて酷いですね。」

「冗談だよ[冗談。」

「じゃ…やつ[言ひ]にしておきます。」

七咲と別れて教室に戻った。

「なあ梅原？」

「ん？ どうしたあ大将う！！」

「うん、実はさ、クリスマス、お前んちで…」

「あああつと…それは無理な相談だぜ大将。」

「へ？」

「俺だつてただ手をこまねいてたつてわけじゃないぜ？」

「それつて…。」

「ま、今年は諦めろ。」

「ひひ…うふ。」

さあ「レで詰んだ。

もつ僕には選択の余地が無くなつた。

「はあ…下で妹さん達の声を聞きながら押し入れに籠るのか…はあ。

「

――一方その頃――

「にししーーー順調順調ーーー」

「まんまと引つかかつてさ…コンピ、つべづべ愚直だと想つよ…。

「まあまあ当田のお楽しみつてことじで。」

「だね。」

「七咲遅いな…。」

土曜日の夕方の事だ。

明日に大会を控え、居残り練習をしたあと
七咲は僕と帰りたいと言つてきた。

幾分時間を潰して、僕は体育館裏に来た。

「いつもの居残りならこの時間までに来てる筈なのに…。」

「あ！…橘君だ！！」

「へ？」

壁に寄りかかる僕に咲野さんが駆け寄つて来る。

「ねえねえ、逢ちゃん待ち？」

「ああ、そうだよ。咲野さんは水泳部の方だったの？」

「うん！…逢ちゃん、明日の試合に向けて猛練習してたよ…。」

「ああ、今もやつてるのかな？」

「うーん…どうだろう、でも私がプールから出た時にはもういなかつたけど、ロッカーに荷物が有ったからまだ居るよ。」

「そつか…どうしたのかわからないけど。じゃあまだ待つて見るよ。」

「うん！…それじゃあまたね…！」

咲野さんは手を振りながら校庭の方へ駆けて行つた。

「そうだよな…明日は大会だもんな。」

僕は階段まで行つて座り込んだ。

「…。」

「先輩…！」

「へ？」

僕が階段の上を見ると七咲が居た。

「…遅くなつてすみません。」

「ん？ああ、大丈夫だから。」

七咲は目を擦りながら階段を降りて來た。

「七咲、ちゃんと目を開けてないと…」

「へ？つあーー！」

「危ないーー！」

七咲は鉄階段を踏み外し、倒れそうになつた。
僕は必死になつて七咲を受け止めたが

バランスを崩して僕は背中から地面に叩きつけられた。

「いててて…。」

「…先輩…大丈夫ですか？」

「七咲こそ、居残りじゃないならどうしたんだ？」

「わ…私…。」「…辛いなら無理に言わなくていいから。」「はい…。」

七咲は僕の胸に抱きついて來た。

「私……頑張ったんです。」

「。」

「でも……とどかないって。」

「……そつか。」

「なあ七咲…。」

「…。」

浮かない顔の七咲が僕の方を向いた。

「七咲はさ、頑張ったよ。」

「そんなんじやないです…。」

「七咲…結果が全てじやないんだ。」

「…違う…違います。」

「…七咲。」

「私、自分で独り舞い上がつてました。」

すっかり暮れた河川敷の街灯に照らされ
七咲の顔がチラチラと見える。

「先輩と出逢う前から、もう代表になつていいて、自分の甘さがみんなの足を引っ張り、自分の首を締めて、先輩に迷惑までかけて。私は本当に情けないと 思います。」

「そうじや…。」

「先輩！…つ」

街灯に映つたのは涙を必死に堪える
いつもと違つ七咲の姿だった。

「でも私…！先輩と一緒に居たい…！代表から落とされても私は先輩と居られれば苦じや無いと思つてました…！」

「七咲……」

「なのほどうして…どうしてこんなに苦しいんですか？先輩……。」「それは……。」

七咲の髪の毛の匂いがした。
僕の胸に七咲は身を任せた。

「それはさ、七咲が優しいからだよ。」

「…。」

「七咲は僕の事もみんなの事も大事にしたいって思つてた。」「はい…。」

「そうやつて自分を犠牲に出来て七咲はとつてもいい子だよ。」「はい…。」

「だからさ、もっと僕に甘えていいんだよ。七咲の辛さは僕がわかつてるから。」「はい…！」

「一緒にテートーいうな七咲。」「はい！…！」

「辛さも忘れられるくらい楽しい一日にしてよくな？」「はい…！」

「はい…！先輩…！」

七咲はそれから声を上げて泣いた。

今までの重圧と辛さを吹き飛ばす様に
七咲はいつまでも泣き続けた。

「七咲、頑張ったな。」「はい。」「

「いいの?響ちゃん?」

「いいのよ...彼女は色んなモノを背負いつゝ遊んでるから...。」

「うーん...。」

「それより、寧々は今田、バイトなんじょ?」

「ただけども...まだ時間有るからもう少しデパート廻つてこいへ。」

「そうね。」

――

日曜日

結局七咲は代表に漏れて
クリスマスパーティーの準備とやらで美也と一緒に出かけた。

「さてと、今日は何をしようかな。」

とりあえず、二日後に控えたデートの予見にでも行こうかとネット
を開いた。

「へえ...水族館が一年前にオープンしたのか。」

となりにはタワーが有る見たいだが
高所恐怖症が仇となりそうなので

七咲が行きたいなら行く事にしようと思つ。

「――!――!ただいま――!」

「おじやまします。」

「あがるよ――!」

「失礼しますっ…。」

「け…結構大人数だな。」

リビングでみんなのはしゃぐ声が聞こえた。
その後、美也が僕の部屋に入ってきた。

「にいにーーーお茶ーーー！」

「おい…美也が淹れろよ…。」

「えーーー…どうせお宝本の鑑賞でもしてたくせーーー。」

「…美也、わかつたからそれ以上喋るなよ。」

「はーーーーにししーーー。」

渋々僕は下に降りてお茶を淹れた。

「何人？」

「みやーと菜々ちゃんと逢ちゃんと紗江ちゃんとコン「かやんとな
るみちゃんで六人。」

「…すいぶん呼んだな。」

「うん…多い方がいいのだ…！」

「へー…。」

ひづしてまた一日が過ぎた。

次の日

学校は創設祭の準備にてんてこ舞いで授業は一切休みだつた。

七咲はとくに

おでんの仕込みに時間を割いていた。

「七咲、どうして僕が手伝わなきゃなんないんだよ……。」「塚原先輩の御指名ですか？」

「うう……それはやうとしたまゝ」の殻むき、なんで冷水なんだ……。「伝統ですか？」

「今日だけはその言葉を恨むよ……。」「それよりも……。」「ん？」

「明日の事、本当にいいんですか？」

七咲の表情が少し曇つた。

「大丈夫だよ。別にあんまり気にしてないから。」「……気にしてください。」「バシヤツ……！」

冷水を顔にひっかけた。

「うわ……さつむ……酷いな七咲……。」「お仕置きです……。」「『1』……『0』めん。」「……私は、先輩と夜にお出かけ出来なくしてみしいんですから……。」「ん? なにか言つたか?」「氣のせいです……。」「氣のせいです……。」

「そつか。」

七咲は大根を切り終えて

「はあ……。」

「橘君。」

三

振り返つてみると、咲野さんが居た。

「咲野さん…どうしたの？」

「そ、うなんだ。で、咲野さんは何を？」

うりん、卵のから剥きたて語りで

「あ……じやあ用意ひ……。」

咲野さんは腕まくりをして、

勢い良く水の中のボウルに手を突っ込んだ。

「ひやあー！」

卷之三

つ……冷たいいあ！！今笑つたでしょ！！！」

「ひどーい！！！伶たいつて言ってくれたらいいのに！！！」

今度はゆっくりと手を入れてから剥き始めた。

「でも結構わかるんじゃ無いの？」

「う…そりや外の水道だから…か。

「うん。」

「でも言つてくれたつていいんじゃ無いのかな……」
「『めんごめん。』

そうして一人で卵を剥き終わる頃には
七咲が戻つて来て

大量の卵を三人で家庭科室まで運んだ。

「なるちゃん、お汁どう?」
「うん、大丈夫だよ!..」
「へー、さすがうどん娘。」
「えへへ、ダシは自身あるから。」
こうして、前日の準備は終わり
七咲と下校した。

「せんぱーい！」

クリスマス当田

まだ早いとはわかつていても
待ち合わせ場所に来ると
もうそこには七咲が居た。

「先輩、遅いですね。」

「なんだよ、三十分も早く来たのに。」

「女の子を塞空の下三十分も待たせて言ひセリフですか？」

「え？ 七咲、一時間も前に来てたの？」

「…は、はい。」

七咲が真っ赤になつてそっぽを向いた。

「どうした？」

「い…いえ、今日は珍しくスカートをはいてみたんですが。」

「あ…そう言えば。」

七咲は最近よく見かける長いスカートをはいていた。

「いいと思うよ。」

「…それだけですか？」

「…似合ってるんじゃない？」

「つ…ぐ、そ、それだけですか！？」

「えつと…七咲、か、可愛いよ。」

七咲はもう真っ赤で僕の手を握り締めた。

「い…いきましよう先輩つ！！」

「お、おーおい七咲引っ張るなつて…！」

七咲とのデートはそうして始まった。

海岸線を歩きながら、
水族館を田指す。

「先輩、本当は私、昨日なかなか眠れなくて困つてて……。」

「じゃあ、今日はすつごに困るな。」

「え? どうことですか?」

「ん、美也つて結構パーティーを何時間もやるタイプだから、明け
方まで付き合わされちゃうぞ。」

「あ…明け方まで、ですか?」

「うん。僕も悲しくなるくらい大騒ぎしても。父さんと母さんはい
つも会社のパーティーで呼ばれちゃつてね。」

「じゃあ、明け方に帰るといつておいた方がいいですかね?」

「そりだね、心配するだらうじ。」

七咲と話をしていると

もう水族館まで着いていた。

「うわーっ高いですねこのタワー。」

「う…うん。」

「先輩……このタワーからこきましちよ?」

「そ…そりだね。」

やつぱり言つ展開になるのかと思つて
渋々タワーに登る事にした。

「うわー…十羽野市も見えますよーー。」

「うんじよーー。」

僕はいきおこよく足を踏み出すと
結構アツサリと乗れた。

「ほら先輩ーー!」

「ん?」

「空色プールサイドですよ。」

七咲は町を取り囲む空を指差した。

「まるで浮いたり沈んだり。プールの水のようなこの町で、私は一生懸命泳いでいる時、先輩とであつて、先輩に恋して、先輩に助けて貰つて。泳ぎ疲れて、いまプールサイドでリートして。…ちょっとクサイですかね？」

「いや…七咲らしくていいと思つ。」

「ふふ、私この言葉、すっごく好きなんですよ。」

「へえ。」

七咲は握っていた手を緩めた。

「先輩…。戻りましょうか？」

「いいのか？」

「大丈夫です。ねえ先輩。」

「ん？」

「…ん。」

七咲の手は僕の頬を抑えていた。

暖かく優しい感触が唇に伝わる。

「んん…。」

「…。」

七咲は泣いていた。

離れたくないと言わんばかりに腕を肩に回してまだキスを続ける。

「ふあ…あ…あは、先輩とキス。しちゃいましたね。」

「七咲…。」

「七咲好きだ…。」

「へ？」

「七咲好きだって言つてください。」

「…言わぬくとも言つよ。七咲…大好きだ。」

七咲の華奢な体の全て力が
僕の胸に伝わって来た。

「橘先輩！…私も先輩が大好き…。」

七咲とのデートはあつという間にすぎて行った。

空色プールサイド32

「先輩、いつしょに帰りましょ?」

創設祭も無事終わり

僕と七咲は校門で待ち合わせた。

息を切らしながら走つて来る七咲に駆け寄る。

「美也と一緒にや無くてよかつたのか?」

「はい。美也ちゃんは用意をしておくから先に帰ると書いて居たので。」

「へー、美也にしては気が利くな。」

「ふふ、大勢ですか。」

「そつか。」

僕は、少し躊躇いながら

七咲の右手を握つた。

「あ…。」

七咲は驚いたのか

一瞬手が遠ざかって、そしてまた強く握り返した。

「帰りましょう…。先輩」

「ああ。」

――――――

「にししーーー!」

「いいの? 美也ちゃん…逢ちゃん置いて来ちゃつて。」

「ノープロブレムだよ紗江ちゃん!!! にいにと逢ちゃんの甘い夜には、これくらいの覚悟じや無くちゃだめなのだ!!」

「甘い…夜つて。そ、そんな、恥ずかしいい。」

「紗江ちゃん…どうして顔が真っ赤なの？」

「……あ……ああ、その、あります。」

「やがて、おもはるが来るまで」

「ニセコヒルズ」

そ そ そ が れ 」

「メリークリスマス、美也ちゃん」

110

「着いた着いた。ケーキ買ってたら結構時間かかっちゃったね。」

「そうですね。じゃあお邪魔します。」

二二

「
？」

「い：居ないんですかね？」

「そんなわけ無いよ。」

リビングの戸を開けると

みやーからにいへ

にししーーー！ドッキリ大成功 みやーはパーティーに出かけるので逢ちゃんと甘い夜を過ごすのだぞ！』

11

僕も七咲も呆然と立ち尽くしたまま
お互いを見た。

「な……七咲、これから出掛けようつつか?」「は、は、え? わなついよ、持つて下せー

「アーティストの行方」

「えっと、私、明け方に帰るつて。」

「うわ……じゃ、じゃあ補導されなこくらい外に出でよつ。その後はその時に考えよつ。」

「はい。」

「あ……」

「どうしました?」

「お金、ケーキに使つちゃつた。」

「…。先輩。」

「ん?…。」

「なら…一人でパーティーしたいです。」

「へ?…え?あ、あうんいいけど。」

「じゃ、じゃあケーキ食べましょ「う?」

「ああ。」

僕と七咲は、こたつに入りながらろくに会話もしないままケーキを食べた。

「て…テレビつけようか?」

「はい…。」

「…つしようと。」

『…スマス・イヴは恋人と過ごす甘い時間を楽しみたいですよね今日のミュージックアワードは、恋人と聴きたいベストソングを紹介して行きたいと思いまーすつ…!
(ワアア――――!-)』

「…これでいい?」

「はい。」

『…最初のナンバーはanzusaさんでI love です…!…ど
うぞ…!-』

「七咲。」

「はい?」

「やつぱり回そう?」

「…やです。」

「すみません。」

もう一度また一人は黙り込んでしまった。

テレビから聞こえるラブソングが異様に心をくすぐった。

「…先輩。」

「ん?」

「やつぱり先輩の事大好きです。」

「僕もだよ七咲。」

「…ほつぺにクリーム付けて畳つセリフじや無いですよ。」

「(…ごめん。」

「ふふ、その顔でそんな顔しないで下さい…。」

「ひ…酷いなあ…。」

「ふふ…いいから口拭いて下さい…。」

「あ…そっか、ハハ。」

「先輩、」
「ん？」
「先輩の部屋に行つてみたいのです。」
「別に構わないよ。」

「へえー、結構綺麗にしてあるんですね。」「結構とか酷いよな七咲。」「酷く無いです。」「酷いよ。」「…。」「じゃあせうこう事にしておきます。」「それより先輩。」「ん？」

「美也ちゃんから聞いたんですが、先輩の部屋の押入れにはプロネタリウムがあるんですか？」「うん。そんな大層なもんじゃ無いけどね。」「見てもいいですか？」
「ああ、いいよ。」

「へえー、凄いですね。」「そんなでも無いよ。」「ねえ、先輩。」「ん？」
「私も書かせてくれませんか？」
「ああ、いいよ。」

「はい。」

「よつし……つとほい出来ました。」

「え? どうごう事?」

「私と先輩の愛の印を。」

「へえー…可愛いね。」

「暗くして見ましょ。」

「え? あ…ちよつと…。」

「ほり、よく見るでしょ?」

「つ…つん。」

「先輩、あつたかいですね。」

「そつかな?」

「ずつとずつとこつして居たい。」

「うん。七咲となら、いつまでも。」

「先輩…。」

「七咲…。」

「今日は甘い夜になりそうですね。」

「ああ。」

皆様。

ほんなんなんなんつうつうつうつうとこ
すみませんでしたっ！！

土下座：

えー

七咲逢編

これにて終了でござります。

長らくの休載

申し訳ござりませんでした…

次回、えー

あ

一見英理子編でお会いしましましたー！

では

次回予告

「お疲れ様。」
「あ、二見先輩。」
「だいたいの内容は掴めているから問題ないわ。」
「さすがですね。」
「あら？お世辞かしら。それにしても素晴らしいわね、七咲の泳ぎ、正直圧巻だったわ。」
「そんなでも無いです……。」
「いいのよ。遠慮は身に悪いわ。」
「あ、はい。」
「…。」
「…。」
「…。」
「…。」
「それじゃあ私から言つわ。」
「はい。」
「作者、また棚町の時の様にノー資料でやるつもりしげにけど、大丈夫かしら？」
「…まだですか、本当に飽きない人ですね。」
「はうあ……。

「それでも期待はしておくれわ。」
「じゃあ、後はよろしくお願ひします。」
「ええ。一見英理子編、よろしく……。」

飽和恋愛滴定1

「次…高嶺さん、88点…！素晴らしいわね。」

高橋先生がテストを配り終えると
断末魔が教室を駆け巡った。

「はいはい、今回の平均点は56.7。B組が最高の64.2だけ
ど…やつぱり一見さんのいるクラスは格が違うわね。」「

「一見かーー！」

「Aは絢辻さん、Cは高嶺さんと星野さんが底上げだけど…、Bの一
見に比べたらなーーー！」

「おい相原、君はどうだったんだい？」

僕の隣の席から柊が覗いてくる。

「よく出来た方だよ…。」

赤いペンで57と書かれたテストを見せる。

「君にしては頑張つたものだな。」

「そういう柊はどうなんだよ…。」

柊はサツと69と書かれたテストを見せる。

「凄いな…。」

「日々の積み重ねと言ひやつせ。」「

「…ぐう。」

「それにしてもあの一見さん。凄いものだな。」「

「え?どうしてさ?」

「僕の情報によると、彼女は100点だったそうだ。」「

「え？…それって…凄いな。」

「ああ、今回も学年トップだ。」

「あ…凡人にはわからない。」

「 」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6360v/>

アマキス・プラス+

2011年12月20日18時50分発行